

ドストエフスキ研究会便り（11）

カラマーゾフの世界

（A）.兄弟たち、スメルジャコフを巡って

ー スメルジャコフとマリアとアリョーシャ ー

6.スメルジャコフへの鎮魂歌

【第十一章10より】

はじめに

今回の第6章で本論「カラマーゾフの世界（A）」は取り敢えず最終回となる。ここで一度『カラマーゾフの兄弟』の全体像について、本論の視点からまとめる試みをしておきたい。そこに今まで我々が取り組んできた様々なテーマを重ね、更に今回取り組むテーマも提示して、「はじめに」としよう。

『カラマーゾフの兄弟』とは「神と不死」を求める「ロシアの小僧っ子」たちが繰り広げる宗教的認識の深化と覚醒のドラマであり、その魂の成長史であると言えよう。この大テーマの下に具体的に展開するのは、何重もの「罪なくして涙する幼な子」たちを巡るドラマである。「罪なくして涙する幼な子」たちの存在。それはまず「報復できぬ苦しみ」と「癒されぬ憤怒」と共に、イワンが凝視する世界の抱える現実である。だがそもそもこの現実とは、イワンを含む四人の兄弟たちが放り込まれた運命に他ならない。幼くして母に死なれ、父親からは「忘れ去られ、棄て去られた」兄弟たち。彼らは魂の真の母と父を、そして真の故郷を求めてそれぞれの人生の旅を続けるのだ。そしてこれらカラマーゾフ家の「罪なくして涙する幼な子」たちのドラマは、やがて故郷家畜追込町での「父親殺し」という懼るべきクライマックスに向けて収束してゆく。その過程で浮かび上がるのが、この作品の最深奥に存在する二人の「罪なくして涙する幼な子」たち、イリュージン少年とスメルジャコフの生と死である。殊にスメルジャコフが「罪なくして涙する幼な子」としての生を何重にも運命づけられたところに、この作品が持つ問題の複雑さと深刻さがあると言ふべきであろう。理不尽で醜悪な運命の内に投げ込まれたこの青年と少年が辿る悲劇的生と悪魔的復讐劇、そしてその果てに彼らを待つ苦悩と死。その死を超えて、彼らは「永遠の生命」の内に摂取されるのか。読者はこの問題の前に立たされるのである。

スメルジャコフやイリュージン少年が突きつける問題を正面から受け止め、それらに対して究極の解答を与えるべく生きるのがアリョーシャである。我々は第一回目から、この作品の「ブラック・ホール」とも言うべきスメルジャコフに焦点を絞り、主に彼との関わりにおいて、順にイワンとドミートリイとアリョーシャのドラマを検討してきた。殊に第4章でイリュージン少年のドラマに沿って確認したように、「実行的な愛」の人アリョーシャとは、イエスとゾシマ長老の遺訓を受け、「罪なくして涙する幼な子」たちの不幸と正面

から向き合い、その苦悩に寄り添い、彼らを運命の悲劇的悪魔的陥穽の中から「光」の中に導き出す存在である。この主人公を中性的で生彩がないとする人が少なくない。だが我々がこの物静かな青年、信と愛の人の内に認めるのは、言葉の真の意味における「強さ」である。かくして「神と不死」の探求、「罪なくして涙する幼な子」、そして「父親殺し」という三つのテーマに、それらを受ける形で「実行的な愛」のテーマが加わって作品の基本骨格・問題軸が構成され、更にはカラマーゾフ家の人々にゾシマ長老やグルーシェニカやカチェリーナやリーザたちが絡み合い、モスクワと家畜追込町を舞台として展開する「聖と俗」の二重構造^{ヴェルテップ}のドラマ、それがカラマーゾフの世界と言えるであろう。

ところでアリョーシャとスメルジャコフ、これら二人の異母兄弟の間には具体的に如何なる交流があったのか。このことについて、作者ドストエフスキイが直接記すことはごく少ない。このため多くの読者と評者が、アリョーシャはスメルジャコフにだけは心を向けなかったとして、上に記したような批判と共に、彼の「実行的な愛」の限界性を指摘するのである。だが作家ドストエフスキイの作品構成力と、それに基づく具体的戦略は、見事に二人の間の見えざるドラマを刻み上げているのだ。この二人の間の見えざる対話、言い換えれば「罪なくして涙する幼な子」スメルジャコフと「実行的な愛」の人アリョーシャとの関係こそ、『カラマーゾフの兄弟』が我々読者に読み取ることを要求する最大の難問の一つであり、またこの作品における最も重要なポイントであると言えよう。今回は主にこの問題を順次検討してゆきたい。まずはスメルジャコフが残した遺書の検討から始めよう。

★このスメルジャコフ論は、拙著『カラマーゾフの兄弟論一砕かれし魂の記録一』（河合文化教育研究所、2016）において、基本的には展開したものである。本論では改めて初回からこの最終回第6章に至るまで、「罪なくして涙する幼な子」の問題を主たる縦糸とし、カラマーゾフ家の兄弟四人の相互関係を丁寧に解きほぐしつつ、「実行的な愛」の人アリョーシャを中心に論証を試みた。関心のある方は拙著も併せてお読み頂ければ、ドストエフスキイのキリスト教理解、殊に聖書テキストの理解について、またその流れの中でアリョーシャが生きる「実行的な愛」と、それが拠って来たるゾシマ長老やシリアの聖イサクの思想の核心と連関を理解する上でも、何らかの参考となるのではないかと思われる。

2018年9月19日

6.スメルジャコフへの鎮魂歌

[第十一章10より]

目次	ページ
①. スメルジャコフの遺書 ―孤絶の中で向き合ったもの―	3～6
②. 「絶滅させる」を巡って（1）―「怒りと裁きの神」の前で―	6～12
③. 「絶滅させる」を巡って（2）―主人公たちのドラマの中で―	12～20
④. スメルジャコフが向き合った「懼るべき」「活ける神」 ―怒りと裁きの神、愛と赦しの神―	20～32
⑤. アリョーシャの「ゾシマ伝」 ―兄スメルジャコフへの鎮魂歌―	32～48

①.スメルジャコフの遺書

―孤絶の中で向き合ったもの―

残された遺書

三度目で最後の訪問を終えてイワンが去った後、サモワールを片付けるべく部屋に入ったマリアが見出したのは、壁に首を吊ったスメルジャコフであった。彼女は直ちにアリョーシャの許に駆けつける。この事情は初回、第1章の冒頭で見た通りである。二人がとって返した時、スメルジャコフはまだ「壁にぶら下がった」ままで、傍らのテーブルの上には短い遺書が残されていた。

「己自身の意志と好みによって己の命を絶滅させる。誰にも罪を負わせぬため」

(十一 10)

イワンが去った後、恐らくスメルジャコフはこれを急ぎ書き記したのであろう。極めて短い、謎のような文面である。この遺書が持つ意味を、今までの五回の考察を基にして、どこまで明白に浮かび上がらせることが出来るか、これが今回の主な課題の一つである。

「父親殺し」という血の線を一線を踏み越えたスメルジャコフとイワン。彼らが直ちに投げ込まれたのは懼るべき「悪業への懲罰」であった。ゾシマ長老の予言通り、二人の罪人の良心に神の裁きが臨んだのだ。イワンが「神に見られる」自分を発見するまでのドラマについては先に見た(第3章)。だがスメルジャコフに臨んだのは、如何なる神であったのか。この問題についても、我々は既に第3章で見たのだが④、本章では彼の遺書と向き合い、彼が辿ったドラマももう一度確認し直すことで、改めてアプローチを試みよう。また「罪なくして涙する幼な子」としての彼が生きた生とは、結局何であったのか。その死とは、如何なる死であったのか。これらの問題も彼が残した遺書と共に、またアリョーシャとの関係で、改めて正面から考えねばならない。

遺書が示すもの

スメルジャコフの遺書を検討する前に、瞬時イワンに目を向けておこう。第3章^[5]で見たように、父親殺しの罪を自覚させられると共に、「神に見られる」自分を発見したイワンの心を占めたのは、最早目の前のスメルジャコフではなかった。彼の神体験とは、裁きの神との直面であると共に、世の裁きとの直面でもあり、そこに下男スメルジャコフが入る余地などなかったのだ。この時のイワンにとってスメルジャコフとは、己と共に神の裁きの場に進み出るべき「罪人」というよりは、彼が盗み出した三千ルーブリと共に、法廷に提出されるべき「証拠物件」でしかなかったのである（十一8）。しかもイワンはこの下男が、「絞首台」への道を歩むことを予感していたにもかかわらず（十一10）、その場を立ち去ってしまったのである。「神殺し」と「イエス磔殺」と「父親殺し」に続き、我々がイワンの「兄弟殺し」と呼ぶ所以である。イワンが歩むべき「十字架」への道は、なお長く険しい（第3章^[5]・^[6]）。

他方、イワンとの最後の会話が示すのは、スメルジャコフには翌日の法廷に出頭する意志など毛頭もないということである。「地質学的変動」の人神思想によって自分を父親殺しに導いた若旦那イワンに対し、恨みや怒りをぶつけようとの意図もない。更に自分の惨めで醜悪な人生の根となった父親フォードルに対して、憎悪や呪いを表現することも一切ない。また逆に、この亡き父に対する憐みの心が覗われることもない。

スメルジャコフのイワンに対する最後の言葉は一言、「さようなら！」であった（十一8）。この一語で彼はイワンばかりか、恐らくこの世の一切と関係を断ち、別れを告げたのだ。その直後に書かれた遺書。「己自身の意志と好みによって己の命を絶滅させる。誰にも罪を負わせぬため」——ここに重ねて用いられた「己」、つまり「己自身の意志と好み」と「己の命」という表現に注目すべきであろう。これら「己」の重複が表わすものとは、自分自身の死を選び取るのは他ならぬ自分であるとの、また自分の死に他人は一切関係なく、また介入も許さないと、絶対的孤絶への断固たる意志と言うべきものだ。ここにいるのは「己」への絶対的固執、否、この世における最後の強烈な自己主張を宣言するスメルジャコフであろう。

第一回目から確認してきたように（第1章^[3]）、スメルジャコフにとっての生とは、侮辱的で忌まわしいもの以外の何ものでもなく、それは憎悪と呪いの対象でしかなかった。いつの間にか人が呼ぶ「パーヴェル・フォードロヴィチ・スメルジャコフ」という名前からして侮辱的と言う外なく、彼にとりこの世における己の存在の必然性・唯一性を知ることは至難のことであり、彼は一人家畜追込町の片隅から世に白い眼を剥く孤独な「観照者」であり続けたのだ（三6）。この下男かつ異母兄弟との交流の末に、若旦那イワンが嫌悪感と共に見て取ったのは、相手の奥に蠢く「測り知れぬ自尊心」、「傷ついた自尊心」であった（五6）。「己自身の意志と好みによって」——この遺書の冒頭から聴き取るべきは、スメルジャコフの「測り知れぬ」「傷ついた自尊心」、そこから発せられる「己」への絶対的固執の

叫びと言うべきものであろう。「己自身の意志」に付け加えられた「好み」。この語の内には彼の「傷ついた自尊心」の最後の疼きと訴えが聴き取られると言えよう。

だがこの叫びをただ単に、世に対する憎悪や呪いの表現だと取ることは誤りであろう。彼が遺書の最後に付した「誰にも罪を負わせぬため」—— これはイワンやドミートリイに対する皮肉や嘲笑などではない。また彼らに対する憐憫を表わすものでも、まして彼らに対する謝罪や愛情の表現でもまずない。彼ら異母兄弟とは一切関係なく、スメルジャコフは父親殺しの罪と一人向き合い、その罪を己の罪として一人贖おうとしているのだ。父親殺しから二か月もが経って、漸く自らの罪を悟るに至った若旦那イワンにも、そして明日無実の罪を着せられようとしているもう一人の若旦那ドミートリイにも、父親殺しの罪は一切係わりのないこと、罪はただ己一人に帰せられるべきものであることを、彼は宣言していると考えるべきであろう。他者を一切排し、絶対の孤絶に立つ彼にとり、最早地上世界の人間もその裁きも一切関係ないのだ。

「己の命を絶滅させる」—— これが遺書の核心であろう。スメルジャコフが今や一人向き合うのは裁きの神であり、彼は自分と神との間に、何ものも、また誰一人として介在することを許さず、この神の前で己の罪を認め、その罪を贖うべく、「己の命を絶滅させる」ことを宣言しているのだ。しかも「己自身の意志と好みによって」—— 裁きはただ「神」の手の内ではなく、「己」の手の内にもあると言うのである。神による「聖絶」と重ねられた、いわば「自己聖絶」の宣言だと言えよう。「絶滅させる」という動詞も、只ならぬ強烈な響きを持つ。この短い謎のような遺書については、なお繰り返し考える必要があるのだが、今は取り敢えず、絶対的孤絶への意志を表明し、絶対的裁きの神の前で一人、己の罪を己自ら処罰し、己の命を己自ら清算しようとするスメルジャコフの姿を認めておこう。その姿が投げる孤高の影は毅然としていて潔い。だがここにはなお「傷ついた自尊心」の残響が^{こだま} 飢し、悲劇的な色彩が少なからず漂う。

マリアに語ったこと

次に我々は、スメルジャコフと神について、そして彼が遺書に記した「己の命を絶滅させる」という尋常でない表現について、聖書的磁場の内で考察しなければならない。

だがその前にスメルジャコフとマリアとの逢瀬の場に戻り、そこで彼が語った言葉をもう一度見ておこう。繰り返し確認してきたように（第1章^[5]、第3章^[4]（2）、第4章^[5]、第5章^[5]等々）、ここで彼はマリアに対し、既に自殺のことを口に出しているのだ。しかもそれは極めて特異な表現による、極めて衝撃的な内容である。つまり理不尽で醜悪な己の運命を呪うスメルジャコフは、父親殺害の前日、自分を慕うマリアに向かい、育ての親グレゴリーに呪詛の言葉を浴びせ、続いて外国人と共にロシア国民と祖国を嘲笑し、更には異母兄弟のイワンとドミートリイについても激しい非難の言葉を吐き、遂には次のような驚くべき言葉を発しているのである。

「この世にまるっきり生まれて来ないで済むのだったら、私はまだ胎内にいるうちに自殺してしまいたかったです」(五二)

己の生を呪い否定する、これ以上に激しく痛ましい言葉があろうか。スメルジャコフが如何に只ならぬ深い孤独の内に生き、この世の生を苦しみとしていたか、そしてその生を如何に激しく憎悪し呪っていたかが、この言葉から明らかとなる。しかも注意すべきことに、この言葉は福音書のイエス・キリストの言葉を向こうに置いて発せられた言葉と考えられるのだ。

「然れど人の子を売る者は禍害なるかな、その人は生れざりし方よかりしものを」
(マルコ十四 21)

千九百年を隔てたスメルジャコフとイエス・キリストの言葉の響き合いについて、その具体的な状況や内容についての検討は既にしてある(第1章^[5])。ここでは片隅から一人、「傷ついた自尊心」を抱え、世に白い眼を向け続けたスメルジャコフが、父親を殺害する前日に表明したこととは、可能ならば母の胎内に戻り、自らの生そのものを無に帰してしまいたかったとの願望であり、しかもその心は神に向かい、イエス・キリストに向かうものであったことを再度確認するに留めよう。

この時スメルジャコフが表明した自殺への願望と、それから二か月後に彼が実際に踏み込んだ自殺。これらの間には一体何があり、彼は如何なる神とあるいはイエス・キリストと出会ったのか。—— これらこそ『カラマーゾフの兄弟』において我々読者が、作者ドストエフスキイから読み取ることを求められた最大の謎であり、課題であることを念頭に置いて、先に進むことにしよう。

2. 「絶滅させる」を巡って —「怒りと裁きの神」の前で—

スメルジャコフの聖書知識

スメルジャコフが遺書に記した「己の命を絶滅させる」。この「絶滅させる」という異様な響きを持つ語について検討する前に、この存在に関わる宗教的聖書の磁場について確認し直しておこう。我々は第一回目以来、スメルジャコフの内から顕われ出る様々な異様さの中に、その感性の病的なほどの豊かさと聖書知識の深さ、そして宗教的形而上学的思索力の高さを認め注目してきた(第1・2章)。例えば、猫を殺害しては一人密かに執り行っていた葬式遊び。ここで少年スメルジャコフは、まずは自ら猫を絞殺した後に、今度は自らが司祭となり、哀れな猫のために葬儀を執り行い、悲痛な葬送の歌をうたうという、異様で痛ましい宗教儀式を一人で創り出していたのである。この時少年は自らを、猫の生死

を支配する万能の主としていたのだ。またこの少年は、グレゴリーを師とする創世記の学習においても、光の始原について創世記の叙述が含む矛盾を、驚くべき鋭利さと皮肉とを以って指摘したのであった。それ以外にも、食べ物に対して彼が示した異常とも言うべき潔癖さ、極度の人間嫌いと女性嫌い、そして頻繁に襲われる癲癇発作等々。これらのエピソードの内に我々が認めたのは、彼の不幸な出生とその後の運命が彼の内に育んだ病的とも言えるほどに鋭敏で繊細な感性と、それに根差す強靱な宗教的形而上学的思索力であった。そこからなされる思索は、人間と世界とその歴史、そしてそれらの根源たる神にまで、更には十字架上で磔殺されるまで「神の国」を伝えたイエス・キリストにも向かうものであった。彼の思索を根底で貫くものとは、自らが万物の始原とその正否を測り、またその終局まで見極め、更にはそれら一切を司ろうとの強固たる意思であると考えられた（第2章^[2]）。

注意すべきことは、彼の宗教的形而上学的思索力が、殊に新約旧約聖書の世界とそれらが抱える問題を巡って展開していたように見えることである。創世記における光の始原の問題も然り、その棄教者論も然り、十字架を前にしたイエスに対する叛逆の言葉も然り、およそスメルジャコフの誕生から死に至るまでの様々なエピソードで、旧約新約聖書を中心とした宗教的問題に関わりのないものはまずないと言ってよいであろう。裸同然で家畜追込町を彷徨する宗教的痴愚スメルジャンチャヤ^{ユロージヴァヤ}を母とし、聖書を種に瀆神的道化を繰り返すフォードルを父として持つスメルジャコフ。この存在にまつわる深い聖書の磁場に目を向け、それを正面から受け止めない限り、彼の言葉と生死が指し示すもの、またその悲劇性と悪魔性の十全な理解はまず不可能なのだ。

更に付け加えると、自らの赤ん坊の死とスメルジャコフの誕生とを同時に体験させられた養父グレゴリーが、この「自然界の混乱」を前にして取り組んだのは旧約のヨブ記であり、また『殉教者列伝』であり、そして『シリアの聖イサクの苦行説教集』であった。上に記したようにフォードルもまた、旧約新約聖書をその瀆神的道化の道具として駆使する存在である（二二・六・八）。イワンやアリョーシャは言うまでもない。カラマーゾフ家の人間にとって聖書世界とは、彼らの思索と行動とが拠って立つ、いわば「ホーム・グラウンド」なのだ。スメルジャコフもまた、このカラマーゾフ家において、二人の「父」の下で育った「ロシアの小僧っ子」であり、たとえ束の間とは言え、また不肖の弟子とは言え、彼ら二人の「父」の「寺子屋」で薫陶を受けた生徒だったことを確認しておこう（第2章^[2]）。イワンとスメルジャコフとの最初の会話の話題が、創世記における光の始原の問題であったことも忘れてはならない（五六、第2章^[6]）。

「己の命を絶滅させる」。—— 彼が遺書に記したこの「絶滅させる」という語についても、以上のような文脈の内に捉えられるべきであろう。これは恐らく彼が旧約聖書から採ったものであり、彼自身の存在理解と神理解に深く関わる可能性が高いと考えられる。以下で旧約聖書における「絶滅させる」とその同類の動詞群について、少々煩わしいが最小限の検討をすることで、このことを確認しよう。

旧約聖書の「聖絶」、「絶滅させる」と同類の動詞群

「^{イストレブリヤーチ}絶滅させる」。これは「^{イストレビーチ}絶滅させる」という完了体の動詞と対になる不完了体の動詞であり、「^{ウニチタジーチ}壊滅させる」(完)「^{ウニチタジャーチ}壊滅させる」(不完)、「^{ラズルーシチ}根絶させる」(完)「^{ラズルシヤーチ}根絶させる」(不完)、更に「^{イスカレニーチ}撲滅させる」(完)「^{イスカレニヤーチ}撲滅させる」(不完)などと共に、怒りと裁きの神エホバ自らが、あるいはエホバ神がユダヤの王に命じ、民族の敵のみならず、エホバから心を逸らし離反したユダヤの民をも絶滅させ、滅ぼし尽くし、無に帰さしめるという極めて旧約的終末論的色彩の濃い動詞群に属するものである。その他の仲間の動詞も幾つか挙げておこう。「^{ラズルーシチ}打ち砕く」(完)「^{ラズルシヤーチ}打ち砕く」(不完)、「^{バグビーチ}滅ぼす」(完)「^{グビーチ}滅ぼす」(不完)、「^{バギーブヌチ}滅亡する」(完了)「^{ギーブヌチ}滅亡する」(不完)、「^{クルシーチ}粉碎する」(不完)、「^{バコーンチチ}清算する」(完)、「^{イシヤクヌチ}枯渇する」(完)等々・・・これらの動詞群が指す概念は、まとめて「聖絶」とも言われる。

[ロシア語の動詞には大部分「完了体」と「不完了体」が対で存在する。前者は動作の全体が視野に置かれ、完了や結果に重点が置かれるのに対し、後者は動作の過程や試みに重点が置かれる。本論ではこれらの動詞の訳語は、基本的に「完了体」も「不完了体」も同じにしたが(表記は略して(完)と(不完)とした)、それぞれが用いられる文脈の中では、例えば「^{イストレビーチ}絶滅させてしまう」(完)、「^{イストレブリヤーチ}絶滅させる」(不完)のように、どちらかの意味がはっきりと出るように訳した場合もある]

これらの動詞の使用例は旧約聖書全篇を通じて枚挙にいとまない。以下では神の裁きと終末を表わすことで有名な「ノアの箱舟」のエピソードと、モーゼの後継者たるヨシユア王に下された「聖絶」の神命と、預言者エレミア個人への召命の場面、これら典型的な三か所を取り上げ、「^{イストレブリヤーチ}絶滅させる」とその仲間の動詞群が旧約聖書を、そして「怒りと裁きの神」を如何に特徴づけるものであるか、確認をしておこう。更に後に、スメルジャコフとの関係で「バラムの驢馬」の物語を取り上げるが、ここにおいても背後で決定的な役割を持つのは「聖絶」の概念である。

[以下の訳はロシア聖書協会『旧約聖書』(2011)、日本聖書協会『舊新約聖書』(1967)による。なお「絶滅させる」とその同類の動詞群の和訳は様々に可能であり、一つに固定することは不可能である。本文で紹介した動詞群も似たような日本語訳で、少々煩わしい。以下の引用文では日本聖書協会の文語訳を基準として、それらに下線をつけ、カッコ内に順次、上の本文で説

明した動詞のルビ付きの訳語を対応させておくので、参考にして頂きたい]

「神^{かみ}ノアに言^{いひ}たまひけるは、諸^{すべて}の人^{ひと}の末期^{を はり}わが前^{まへ}に近づ^{ちか}けり。其^そは彼等^{かれら}のために暴虐^{ぼうぎやく}世^よにみつればなり。視^みよ我^{われ}、彼等^{かれら}を世^よと共^{とも}に剪滅^{ほろぼ}さん」
(創世記六 1・3 // 順に「壊滅させる」「清算する」)

「ヨシュアこれらの王^{おう}の一切^{すべて}の邑々^{まちまち}およびその諸王^{しよおう}を取り、刃^{やいば}をもてこれを撃^{うち}て、
儘く滅ぼせり、エホバの僕^{しもべ}モーセの命^{めい}じたるがごとし」
(ヨシュア記十一 1 2 // 順に「絶滅させる」「壊滅させる」)

「みよ我^{われ}けふ汝^{なんぢ}を萬民^{ばんみん}のうへと萬国^{ばんこく}のうへにたて、汝^{なんぢ}をして或^{あるひ}は拔^ぬき、或^{あるひ}は毀^こち、
或^{あるひ}は滅^{ほろぼ}し、或^{あるひ}は覆^{たふ}し、或^{あるひ}は建^たて、或^{あるひ}は植^{うゑ}しめん」
(エレミア記一 1 0 // 順に「撲滅させる」「根絶させる」「滅ぼす」「粉碎する」)

「諸^{すべて}の人^{ひと}」「一切^{すべて}の邑々^{まちまち}」「萬民^{ばんみん}」「萬国^{ばんこく}およびその諸王^{しよおう}」、つまり地上の被造物一切が、エホバ神の怒りと裁きの前に滅ぼし尽くされ、無に帰さしめられるのだ。—— 創世記における神の創造、光の始原を問題とし、更には母の胎内での自殺さえ口にするスメルジャコフが、創造・始原とは逆に、旧約のエホバ神による徹底的裁きと終末、「聖絶」についても思いを馳せ、これら動詞群を自らの語彙と思索の範疇に入れていた可能性は少なくない。彼が遺書に記した「己の命を絶滅させる」、この表現が旧約聖書のエホバによる「聖絶」と連なることは、まず疑いの余地がないだろう。スメルジャコフと旧約の「聖絶」の概念。以下にこの結びつきを、筆者が何気なくしたように見える言及の内に、確認しておこう。

スメルジャコフの二人の父、そして聖書

「場違いな会合」の後、カラマーゾフ家における夕食の席のことである。この場が、その日ゾシマ長老の庵室で持たれた「場違いな会合」に劣らず、如何に聖書的话题に満ちたものであるかは驚くべきものがある。グレゴリーが持ち出した殉教者のエピソードを受けて、突然スメルジャコフが展開したのは棄教者論であった(三七)。これについては第2章で詳しく見てある〔4〕。筆者はこのエピソードの紹介にあたり、「突如バラムの驢馬が口を開いた」として、スメルジャコフを旧約の民数記に登場するバラムの驢馬と重ねるのである(二十二 2 1－3 5)。先に見た三つの「聖絶」の例と同じく、このエピソードもまた、エホバ神の「聖絶」を背景としない限り、驢馬の持つ役割も意味も光ってはこないであろう。以下に「バラムの驢馬・スメルジャコフ」について見てみよう。

民数記のバラムの驢馬

民数記の中盤（十一―二十章）、ここで語られるのは、ユダヤ民族をエジプトから脱出させ、彼らを率いてカナンの地を目指すモーゼが、その後四十年間にわたり続けた荒野の放浪についてである。この放浪とは、モーゼが突き当たった二つの敵との闘いであった。一つは外なる敵、すなわち旅の行く手を阻む様々な異民族との闘いであり、もう一つは内なる敵、つまり旅の苦しさに不平をこぼし、エジプトからの脱出自体を後悔するユダヤの民の、モーゼとエホバ神からの離反との闘いである。この両者との戦いにおいて、カナンの地に向けてモーゼを導くエホバ神は、外部の敵をも内部の敵をも共に容赦なく「滅ぼし尽くし」「絶滅させて」ゆく。「聖絶」である。

エホバによる「聖絶」の闘い。我々のエピソードは、大きくはこの流れの中で起こる。イスラエルがいよいよヨルダン川東岸の地モアブに至ろうとする時のことだ（二十二章以降）。これを恐れたモアブの王バラクは、霊能者あるいは占い師あるいは予言者バラムに、イスラエルに対し「呪い」をかけることを依頼する。ところがバラムに対して下ったのは、なんとイスラエルの神エホバからの託宣であり、バラク王の意向とは逆に、イスラエルを「祝福」せよとの命であった。この第一の宣託を始めとして、民数記が四度にわたって伝えるのはバラムに対するエホバ神の宣託、イスラエルの敵に対する激しい怒りと裁きの宣告である。自らが異民族に属するバラムが伝えねばならないのは、イスラエルの民に対する祝福と、エホバ神による情け容赦のない「聖絶」の意志なのだ。――エホバを神とするイスラエルの民によって「獲物が喰らい尽くされ」、「掻き殺された者たちの血が飲み干される」であろう（第二の託宣、二十三 24）。「諸国民は喰らい尽くされ、彼らの骨は粉々に砕かれ、矢で刺し通される」であろう（第三の託宣、二十四 17）。そして「ヤコブは彼らの敵を支配し、生き残りの者を町から滅ぼし尽くす」であろう。そして彼らは「永遠の滅びに至る」であろう（第四の託宣、二十四 19, 20, 24）。これらは皆、先に見た三つの旧約聖書における「聖絶」の表現そのものである。

バラムは当初、バラク王とエホバ神との間で自らの立場を決めかねていた。バラムはイスラエルの民ではないからだ。しかし彼は普遍的立場に立つ霊能者・占い師・予言者として、エホバ神の神託に従うことが自らの取るべき道であることも分かっていた。なお迷いの完全には晴れぬまま、バラムはバラク王の再度の要請に応え、王の許に向かう。

バラムの驢馬の登場はここからである。バラク王の許に向かう道の途上、なぜかバラムの乗った驢馬がまずは正道を逸れ、次には隘路の壁に主人バラムの片足を押し付け、遂には驢馬自身が狭い場所にしゃがみこんでしまう。怒ったバラムは、これらの三度とも杖で驢馬を打ちつける。すると三度目に、驢馬は口を開いて言うのだった。「一体私が何をしたいので、あなたは私を三度も打つのですか」（二十二 28）。驢馬との応対の最中である。突如バラムの眼が啓かれる。その眼に映ったのは、エホバ神の使いが抜き身の剣を手に、道に立ち塞がる姿であった。この姿が最初から驢馬には見えていたのだ。バラムの心は定まる。エホバ神の託宣を、そのままバラク王に伝えねばならない……

バラムの驢馬とスメルジャコフ

カラマーズフ家の夕食の席。棄教者論を語り出したスメルジャコフを指し、筆者が「突如バラムの驢馬が口を開いた」と表現したこと。ここにそう深い意味はないということも出来よう。筆者はその直前スメルジャコフについて記し、日頃余計な口は一切きかず、何年もの間ひたすら「印象」を積み重ねてきた「観照者」であるとしているからだ（三六、第二章^[3]）。逆にスメルジャコフとバラムの驢馬について、様々な深読みの可能性もあるだろう。ここでは我々は「聖絶」の概念に焦点を絞り、そこからこの話を我々の叙述の線上に繋げておこう。

この物語の主人と従者、バラムとその驢馬とが究極向き合うのはエホバの神であり、ユダヤ民族にも異民族にも絶対の至上権を以って臨む神、圧倒的「聖絶」の神である。バラムはイスラエルの民ではなかった。しかし本来一民族の狭い視野を超えた地平に立つべき霊能者・占い師・予言者として生きる彼は、究極の真理がイスラエルの神エホバの神託の内にあることを知っていた。だが彼はその懼るべき神託をバラク王に伝え、王がエホバ神の意志に従うべきこと、さもなければ彼らを待つのはエホバによる「聖絶」の運命であると伝えることを躊躇していたのである。ところがこのバラムの眼をエホバ神に対して最終的に啓かせ、その躊躇の心を断ち切らせたのが、他ならぬ彼の驢馬であった。この驢馬こそが裸の眼で、エホバ神とその「聖絶」の絶対至上性を正面から見据えていたのである。

父親殺しの直後から「悪業への懲罰」に曝され、裁きの神と正面から直面させられたスメルジャコフは、イワンとの三度にわたる対決の末に、この若旦那の眼を覆っていた「懼れ」と「夢」と「幻」の帳とぼりを除かせ、その眼を父親殺しの罪に対して、そして神に対して啓かせる（十一八、第三章^[4]）。イワンはバラムであり、スメルジャコフはバラムの驢馬なのだ。「聖絶」という視野の下に、具体的には「悪業への懲罰」の視野の下に、ドストエフスキイはスメルジャコフを深く旧約的磁場の内に置いていたと考えられる。

だがスメルジャコフという存在を、ただ裸の眼で神を見つめ、バラム・イワンの眼を神に対して啓かせた「義しき」忠実な従者であると結論づけるとしたら、それは余りにもナイーブな読みということになるだろう。問題は、バラムの驢馬の物語が持つ象徴性は、このような対比だけで汲み尽くされるものではないことである。先に見たように、バラムの驢馬スメルジャコフが遺書に記したのは、己の罪ゆえに、己の命を神の「聖絶」に曝すという意味であった。より正確には、彼は己の罪に対する裁きが、「神」の手の内にあるものとすると同時に、「己」の手の内にもあると宣言していたのだ。つまり神による「聖絶」と重ねられた、いわば「自己聖絶」の宣言である。ここにはエホバ神の「聖絶」と、それに対する人間の側の絶対の服従・帰依という、単直線的な視野の内には収まり切れない意味の広がりや複雑さ、つまりは「バラムの驢馬・スメルジャコフ」の心、その内にある「測り知れぬ」「傷ついた自尊心」の問題が存在するのだ。

ドストエフスキイは旧約世界を超えて、スメルジャコフを更に広く複雑な聖書的象徴体系の内に組み込んでいると考えるべきであろう。本章の目標は、この複雑な象徴性を解き

ほぐし、スメルジャコフの内面の理解と共に、彼が直面させられた神と、その死の意味とを出来るだけ正確に理解するよう努めることである。そのために以下では、彼が遺書に用いた「絶滅させる」という語とその同類の動詞群を、旧約世界から更に新約世界にまで広げ、そしてまた対象とする人物も、スメルジャコフから更に他の人物たちにまで広げ、「聖絶」の概念をより広い視野の内に捉えるよう試みてみなければならない。

3. 「絶滅させる」を巡って(2)

—主人公たちのドラマの中で—

スメルジャコフが記した「己の命を絶滅させる」。この遺書が置かれた磁場が聖書世界、殊に旧約の世界である可能性が高いことが確認された。だがスメルジャコフが旧訳聖書に通曉していたとしても、彼が旧約的「聖絶」の神、「怒りと裁きの神」をどのように受け止めていたかは、まだ必ずしも明確にはなっていない。我々は更に「^{イストレビーチ}絶滅させる」あるいはそれと同類の動詞群が、スメルジャコフの遺書以外で用いられている例も確認してみよう。これらの動詞群は、主要な登場人物の言葉の内に、しかも彼らの思想と行動の核心とも言うべき部分に、互いに相呼応し合うかのように登場する。しかもそれらは必ずしも旧約の神と結びついているわけではない。そもそも「神という観念」自体を人間の心から「根絶させる」ことを目指す、ラディカルな叛逆の思想家イワンもいれば、また「虫けら」たる自分の命を「絶滅させる」ことを宣言するドミートリイもいれば、ゾシマ長老のように、この語をイエス・キリストを忘れた人間が、「滅亡」「絶滅」の危機に陥るという終末論的危機について語る場合もあるのだ。イワンとドミートリイ、そしてゾシマ長老とアリョーシャ。彼らにおいて、これらの動詞群がどのように用いられているか、作品内での登場順に検討をし、カラマーゾフ世界における「絶滅」の概念を広く捉えてから、改めてスメルジャコフに戻ることにしよう。

(1) イワンの場合・1

「^{イストレブリヤーチ}絶滅させる」(不完)と「^{イストレビーチ}絶滅させる」(完)と同類の「^{ラズルシャーチ}根絶させる」(不完)と「^{ラズルーシチ}根絶させる」(完)、また「^{ウニチタジーチ}壊滅させる」(完)や「^{イシヤクヌーチ}枯渇してしまう」(完)。ワンの言動に関わる中核部分を表現するのもまた、これらの動詞である。まずは「場違いな会合」において地主のミウソフが、イワンが町の上流階級の婦人たちの集まりで「地質学的変動」の思想を説いていたと暴露する部分を見てみよう。

「イワン君は議論の中で、以下のようなことを厳かに言明したのです。—— この地上のどこにも、人間にその同類を愛するよう強いるようなものなど、絶対に何もありはしない。人間が人間を愛すべきだというような自然の法則など全く存在しないのだ。たとえ地上に愛が存在し、実際今に至るまで存在していたとしても、それは自

然の法則によるものではなく、ひとえに人間が自分の不死を信じていたからに過ぎない。——イワン君はこれに、更に次のように付け加えたのです。——正にここに自然の法則の全てがある。それゆえ人間の内にある自己の不死への信仰を壊滅させてしまえば、人間の内にある愛ばかりか、この世の生を続けていこうという生命力も直ちに全て枯渇してしまうであろう。それどころか、そうなった暁には、もう不道德なものは何一つなくなり、一切が許されるであろう。人肉喰いさえもが・・・」(二六)

人間の内なる愛と生命力が、不死への信仰から来るものであり、しかもその不死への信仰とは、神という観念と共に、人間が造り上げた習慣でしかない。それゆえ、イワンによれば、ただ習慣・偏見でしかない「神と不死」への信仰を「壊滅させてしまい」さえすれば、人間からは愛も生命力も「枯渇してしまい」、消え去ってしまうであろうというのだ。

これはイワンの「地質学的変動」の正に核心部分である。モスクワにおける「神と不死」探求の末に至り着いた「地質学的変動」の思想。彼がこの思想の真理性と有効性を実証すべく故郷の家畜追込町に帰ったことは、既に繰り返し見てきた通りである(第1・2・3章)。イワンはこの人神思想を、まずはスメルジャコフに、そして町の上流階級の婦人たちに説いていたのだ。その思想の過激さは、ミウーソフの反応からも明らかなように、「壊滅させてしまう」や「枯渇してしまう」などの言葉の激しさと相俟って、それを直接聞かされた相手のみならず、間接的に聞き知った人々にも強烈な衝撃を与えていたのである。

この「場違いな会合」の場で、ミウーソフがイワンの「地質学的変動」の思想の宣布について暴露した時、集まりに遅れて到着したばかりのドミートリイも、この思想に大きな関心を寄せている。アリョーシャもまたイワンと「大審問官」物語を挟んで対決した際に(五五)、兄の人神思想の帰結たる「一切が許されている」という定式に激しく反論する。彼もまた「神と不死」への信仰を「壊滅させてしまう」という兄の過激な思想について聞き知り、心を痛めていたのだ。そしてアリョーシャは、大審問官へのキリストの接吻を斥けたイワンに、彼自ら接吻を与えるのであった。だが先に見たように(第3章^[1])、「キリストの愛」を生きて伝えるアリョーシャの接吻に一瞬心を揺り動かされたものの、イワンを待ち構えていたのはスメルジャコフであり、彼はこの「前衛的肉弾」に父親殺しへの最終的な同意を与えてしまうのだ(五六)。イワンの内なる悪魔の「否定の精神」は、行き着くところまで行かずには、つまり内なる「神と不死」の観念を「壊滅させてしまう」ところまで行かずには、最早立ち止まることは出来なかったのである。

(2) イワンの場合・2

さてスメルジャコフとの三度目で最後の対決の場において、この異母兄弟の自殺を予感しつつも、そのまま立ち去ってしまったイワンを部屋で待ち受けていたのは、彼の内なる悪魔であった(十一九)。父親殺しの罪を最終的に自覚し、その心を神に傾けつつあるイ

ワンと、なお自らを神とする倨傲の精神に憑かれたイワン。悪魔が試みたのは、心を大きく揺れ動かせるイワンをもう一度、モスクワで「地質学的変動」の思想を高らかに宣言していた頃のイワンに立ち帰らせることであった。その「地質学的変動」の冒頭をもう一度見てみよう（第2章^[5]）。

「彼ら〔神を否定する「新しい人たち」〕は全てを^{ラズルニシチ}根絶させてしまい、人肉を喰らうことから始めようと考えている。愚か者どもめ。この俺様に尋ねようとししないで！俺に言わせれば、何一つ^{ラズルシヤーチ}根絶させる必要などないのだ。人間の内にある神という観念を^{ラズルニシチ}根絶してしまいさえすればよいのだ。仕事に取り掛かるべきは正にそこからだ。そこから始めるべきなのだ。ああ、何一つ理解しない盲人どもめ！ひとたび人間が一人残らず神を^{アトレツツア}否定しさえすれば（そして俺はその時は、地質学上の時期と並行して成就するものと信じている）、その暁には、人肉など喰らわずとも、自ずと旧来のあらゆる世界観や、そして何よりも旧来の道德観の一切が^{パースチ}失墜し、新しきものの一切が到来するのだ」（十一9）

ここでもイワンが用いるのは、スメルジャコフが遺書に記した「^{イストレブリヤーチ}絶滅させる」と同類の「^{ラズルニシチ}壊滅させる」や、先の「^{ウニチュタジーチ}根絶させる」など、極めて激しい動詞群である。先に見た「^{ウニチュタジーチ}壊滅させる」（完）や「^{イシヤクヌーチ}枯渇してしまう」も入れて、ここでイワンがこれらの動詞群を用いる文脈を改めて確認しておこう。

先に確認した旧約諸書の動詞群は、基本的にはエホバ神の立場からの「聖絶」を表現するものであった。この「聖絶」の対象は異教神を信じる民と、エホバへの信を失ったイスラエルの民であり、これら二つの対象に対して「怒りと裁きの神」エホバの徹底的な「絶滅」が宣言され、そして鉄槌が下されるのだ。

これに対してイワンの場合、「壊滅」あるいは「根絶」の対象とは「神と不死」の観念そのものである。イワンがこの「壊滅」と「根絶」の思想に至った経緯は、既に確認してある（第2章^[5]）。つまり人間の内にある「神と不死」という観念、この不思議の前に正面から立ち、熱烈な探究を続けた「ロシアの小僧っ子」イワンは、やがて自らの内なる悪魔の導きに従い、「神と不死」という観念とは、実は人間の「良心」が根拠もなくただ怯えるだけの、何ら実体のないものだと考えるに至ったのだ。そもそもこの「良心」の存在自体が、彼の悪魔によれば、「七千年にわたる、世界中の人間の習慣によって」創り上げられた、何ら確たる根などないものなのだ。それ故、このことに気づいた人間は、「神」という観念も「不死」という観念も、そしてそれらに怯える「良心」も「壊滅させてしまい」「根絶させてしまい」さえすればよいのだ。その時、一切は「失墜し」「枯渇してしまう」であろう。そしてその後は、人間が神になりさえすればよいのだ。——「そんな習慣を捨てて、神になろうではないか」。この悪魔の囁きに、イワンは「然り」と答えたのである（十一10）。

自らを「一切が許されている」神として宣言すること。イワンがこの結論に至る道程で

行く手を遮った様々な障害、その中でも人間の内に根を張る「神と不死」という懼るべき観念の茨、そしてこの茨と複雑に絡み合う「良心」という名のもう一つの厄介な茨。—— これら人間の内に蔓延^{はびこ}る茨を取り払うべく彼が振るった斧が、「壊滅させる」「根絶させる」等の他動詞であり、また「失墜する」「枯渇してしまう」等の自動詞だったのだ。この斧はやがて実際に故郷の家畜追込町で、彼の「前衛的肉弾」スメルジャコフが手にする文鎮となって、父親フォードルの脳天をたたき割り、その存在を「根絶させ」「絶滅させ」、更には逆にイワンをもスメルジャコフをも「根絶させ」「絶滅させる」に至るであろう。「悪業への懲罰」という名の「聖絶」である。

神という観念を「根絶させる」こと、「絶滅させる」ことから、逆にその神によって「根絶させられ」「絶滅させられる」ことへ。「絶滅させる」という動詞とその同類の動詞群によって、作者ドストエフスキイが主人公たちのドラマをユダ的人間論の磁場の内に置き、旧約世界を超えて更に新約世界をも含む広く複雑な聖書的象徴体系の内に組み込んでいることが確認されよう。（「ユダ的人間論」や、小出次雄の「相互磔殺」の概念については、拙著『ゴルゴタへの道』、新教出版社、2013を参照）。

（3）ドミートリイの場合

次にドミートリイである。前回見たように（第5章^[3]）、グレゴリーイを殺害してしまったと思い込んだドミートリイは、翌朝太陽が昇ると共に自らの命を絶つことを決意し、ペルホーチンに次のように語りかける。

「僕は神の創造を祝福する。今も喜んで神とその創造を祝福しよう。だが・・・今は悪臭漂う一匹の虫けらを^{イストレビーチ}絶滅させる必要がある。そいつが這いずり回って、他人の人生を台無しにしないように・・・」（八五）

グレゴリーイ殺害による罪意識が、ドミートリイに自らを「悪臭漂う一匹の虫けら」とあると自覚させ、自らの存在を「絶滅させる」ことを迫ったのだ。実際にはグレゴリーイは死ななかったのだが、この「自己絶滅」の決意は、ドミートリイの自覚史の中で、決定的とも言うべき転換点の一つとなったと言えるであろう。この決意が彼をモークロエ村へと追いやり、グルーシェニカの回心体験の切っ掛けとなり、今度は逆に彼女に導かれ、「餓鬼」の夢を中心とする彼自身の回心体験が生まれる切っ掛けとなったからである。

思い起こされるのは『罪と罰』のラスコーリニコフだ。この青年もまた、いざ血の一線を踏み越えて悟らされたのは、自分がナポレオンどころか「一匹の虱」でしかないという厳然たる事実であった。彼もまたある一夜、自殺への衝動を抱え、ペテルスブルクの街をさ迷い歩く。だがこの青年は、結局生に帰還する。死によって問題が解決するとは思えなかったのだ。その後彼が辿るのは、ソーニャに導かれての長い「十字架」への道である。その同じ夜、何百万もの雨粒が滴り落ちる「雨の木」^{レイン・ツリー}の根元で、自らの頭を拳銃で撃ち抜

くのはスヴィドリガイロフだ。意識の底に埋もれさせていた忌まわしい罪の記憶が甦り、それに急き立てられた末の自己処罰、自己清算の自死である（拙著『「罪と罰」における復活—ドストエフスキイにおける聖書—』第五章、河合文化教育研究所、2007）。

『罪と罰』と『カラマーゾフの兄弟』。ラスコーリニコフに対して、ドミートリイとイワン。スヴィドリガイロフに対して、スメルジャコフ。血の一線を踏み越えてしまった罪人たちが選び取る道、「十字架」への道と「絞首台」への道（十一9、第3章^[6]、本章^[5]）。ドストエフスキイが福音書的磁場において描き出す「悪業への懲罰」の二つのドラマである。スメルジャコフの自死もまた、その遠い予型を『罪と罰』のスヴィドリガイロフの自己処罰、自己清算の自死の内に持ち、ドストエフスキイ文学の長い流れの中に置かれる一つの悲劇であることが確認されるであろう。

ドミートリイに戻ろう。この青年に直ちに「自己絶滅」を決断させたもの。それはグレゴリーイを殺害してしまったとの自覚と、自分が「悪臭漂う一匹の虫けら」でしかないとの認識であった。如何にもドミートリイらしい即座の激しい決断である。だがこの決断が、旧約的な怒りと裁きの神に迫られた「絶滅」への決断であったと考えることは難しいであろう。ギリシア神話やドイツ・ロマン派の詩人たちを愛する彼が、それらと同程度に旧約聖書にも親しみ、この世界のドラマや概念を自らの言動の土台としていた痕跡はまず見られない。彼が用いた「絶滅させる」という動詞は何処に由来するのか。イワンがこの動詞自体は用いず、他の同類の動詞群を用いているのに対し（「壊滅させる」「根絶させる」、また「枯渇してしまう」「失墜する」）、ドミートリイは、正にスメルジャコフと同じ「絶滅させる」を用いて自殺の決意を表明したのだ。「場違いな会合」で彼が耳にしたのはイワンの「地質学的変動」の思想である。この会合も彼の自殺の決意も共に、スメルジャコフの自死より二か月も前のことである。

スメルジャコフとドミートリイとが図らずも共に、自殺の決意を表明すべく用いた「絶滅させる」。その根にあるのは、カラマーゾフ家全員の内に脈打つ「一切か、無か」の激しい精神と考えるべきであろう。あの柔和で静かなアリョーシャ。十七歳の彼が出家する経緯を記す筆者の筆を思い起こそう。イエスの呼び声に応えたアリョーシャは、「一切か、ニループリか」の厳しい二者択一の覚悟を胸に、故郷の家畜追込町に向かったと記される（一5、第4章^[2]）。「一切か、無か」の厳しい絶対排中律の精神を以って「神と不死」を求めるアリョーシャ、その彼が生きる「実行的な愛」とそれが持つ「強さ」。これが第4章で我々の扱ったテーマであった(同上)。グレゴリーイの血に塗れ、自らが「悪臭漂う一匹の虫けら」でしかないと悟ったドミートリイが、直ちに至った「自己絶滅」の決意。ここには彼独自のシラー的ロマンチズムの精神が脈打つことも否定は出来ない。だが我々はこれを更に、アリョーシャの精神と響き合う、ラディカルなカラマーゾフ的宗教的心情の発露と受け止めたい。アリョーシャやドミートリイばかりでない。本論が一貫して注目してきたのは、イワンはイワンで、そしてスメルジャコフはスメルジャコフで、それぞれのラディカリズムを生き、そして表現するカラマーゾフの兄弟たちのドラマである。「絶滅さ

せる」とその同類の動詞群は、旧約的「聖絶」の概念であることに加えて、この兄弟たちの奥深くに脈打つ「一切か、無か」の精神を最も自然に表出する、いわばカラマーゾフの語彙、あるいは「ロシアの小僧っ子」的語彙の内にも位置づけられるべきであろう。それはアリョーシャの場合で明らかなように、また次のゾシマ長老の場合でも明らかなように、イエスを向こうに置いた、優れて新約的精神と言うべきものであることも確認しておこう。

(4) ゾシマ・アリョーシャの場合

「絶滅させる」と同類の動詞群は、アリョーシャが編纂した「ゾシマ伝」にも登場する。ゾシマ長老の説話と説教が収録された後半五つの章の内、二番目と最後の章である。第二章は「主従について、主従は互いに精神的に兄弟となり得るかについて」と題され(六3F)、最終章は「地獄と地獄の火について。神秘的考察」と題され(六3I)、共にゾシマ長老の思想を鮮やかに描き出すものである。後者では長老の「自殺者論」が紹介され、これにスメルジャコフの生と死に関するアリョーシャ自身の考察が織り込まれる形で、「ゾシマ伝」が締め括られる。この最終章の考察は本論の結論部を構成するものであり、その際に検討することにして(5、★p.39以下)、ここでは前者のみを取り上げておこう。

「ゾシマ伝」後半の第二章。ここで紹介されるゾシマ長老の言葉は、題名が示す通り「主従」関係を論じたものである。ところで我々は今に至るまで「主従」関係の問題を正面から取り上げてはいない。だがこの問題は、殊にスメルジャコフと他の登場人物たちとの関係を中心に、既に様々な形で登場しており、この作品の主要テーマの一つと言うべきものである。ここで改めてそれらを確認しておこう。

まず「主従」関係の問題で、我々読者に提示される最も衝撃的な事実とは、スメルジャコフがほぼ確実にフォードルの嫡出子であり、しかもこの父の下で働く下男であるという事実であろう。この「親子」と「主従」の歪な捩れこそ、この作品を動かす負の駆動力と言うべきものである。またスメルジャコフとイワンとは、互いに「異母兄弟」でありながら、また「地質学的変動」の思想を巡って深く共鳴し合う「師弟」とも呼ぶべき間でありながら、イワンはスメルジャコフとの間に「若旦那下男」の隔絶を設け、インテリとは思われぬ蔑称を次々と投げつけ、出会いの熱気が冷めるや、最早相手の内面には何ら関心を示さない。しかし父親殺しを巡って二人の間には「主従」関係の逆転が生じる。この逆転はやがて「悪業への懲罰」の現前と共に、更に顕著な悲劇的悪魔的相貌を帯びてゆくであろう。若旦那は下男に導かれ神との出会いを果たし、自らの罪の最終的な自覚も与えられながら、この「異母兄弟」を「絞首台」に残して去ってゆくのである。またスメルジャコフという「異母兄弟」を、イワン以上に徹底して「若旦那下男」の関係でしか扱わず、彼の自殺のことを知っても犬呼ばわりをするのが長兄のドミートリイだ。だがこの若旦那を父親殺しの犯人に陥れることで、スメルジャコフもまた「主従」関係の逆転を見事に果たすであろう。一方で、これら「主」と「従」の歪なものと言うべき人間関係とは無縁な存在がアリョーシャだ。この「実行的な愛」の人は、イリュージン少年に対してと全く同

じように、スメルジャコフを他の誰とも「平等であり」「同じである」として、接し続けるであろう。この点は改めて後に見てゆこう〔5〕。

このようにスメルジャコフを中心として、カラマーゾフ家の「主」と「従」の問題は、各人それぞれの人間理解や世界理解とも深く結びつき、更には広く「罪なくして涙する幼な子」の問題と「実行的な愛」の問題とも密接に絡み合う形で、この作品を突き動かす大きな「駆動力」の一つである。アリョーシャが「ゾシマ伝」にこの一章を設け、それに「主従について、主従は互いに精神的に兄弟となり得るかについて」との題名を付したこと自体が、彼がこの問題を如何に重大なものと考えていたかを示すものであろう。アリョーシャは家畜追込町で起こった様々な事件の少なくとも一因が、亡き兄スメルジャコフを中心とする歪な人間関係にあったものと捉え、改めて「主従」の問題を、師ゾシマ長老の言葉と重ねつつ、思索を重ねていたと考えられる。「ゾシマ伝」におけるこの思索もまた、師ゾシマ長老から命じられ修道院を出たアリョーシャの、「実行的な愛」の行為そのものだったのだ。また我々は、ドストエフスキがこの「主従」の問題を、福音書におけるイエスの生と死に根を置く「実行的な愛」の問題として捉えていることも忘れてはならないであろう(第4章〔2〕)。ゾシマ長老にとり「隣人愛における完全な自己犠牲の段階にまで至った」のがイエスであり(二4)、この存在は十字架上の死に至るまで「従」として、「僕」としての生を貫いたのだ。

前置きが少々長くなったが、以上を踏まえ、「ゾシマ伝」の中で「絶滅させる」とその同類の動詞群が用いられた箇所を見てみよう。修道院で孤独と沈黙と祈りの内に「キリストの御姿」を守るゾシマ長老が説くのは、俗世の人間の主従を超えた真の結合、イエス・キリストを範とする「実行的な愛」の必要性であり、その言葉の内に満ちるのは、己の知力に頼り、キリストの道から逸れてしまった人間の運命への切迫した危機感である。

「彼ら [自分たちの知力だけに頼る人間] は、公正に[社会を]建築することを夢見ている。だがもしキリストを拒否するならば、世界を血の海と化して終わるであろう。なぜならば血は血を呼び、剣を抜くものは剣によって滅亡してしまうからである。かくして、もしキリストの約束がなければ、その時人間は、地上において、最後の二人になるまで互いを絶滅させ合ってしまうであろう。しかもこれら最後の二人は、己の傲慢さゆえに、お互いに我慢ということが出来ず、遂には最後の一人が最後から二番目の者を絶滅させてしまい、その後は己自らをも[絶滅させてしまう]ということになる。《柔和で謙虚な者 [マタイ五5] のためには、このこと[艱難の期間]は縮められよう [マルコ十三 20] 》というキリストの約束がなかったならば、実際そうになっていたことであろう」(六3F)

世を支配する「主」と「従」の差別をなくし、人間が真の「兄弟」として結合すべきであること。このゾシマ長老の説教を支える二つの要素に注目すべきであろう。一つは、人々

に「柔和で謙虚な者」として「実行的な愛」を生きることを説き、また自らがその生を十字架上で磔殺されるまで貫いたイエス・キリストへの、長老の絶対の信である。アリョーシャはこの師ゾシマのキリスト中心主義を、自らの「実行的な愛」の根として提示したと考えるべきであろう。他の一つは、繰り返される「絶滅させる」や「滅亡する」が示すように、兄弟同胞への「実行的な愛」を忘れ、「主従」関係とそれを維持すべき「力」に拠って立つ人類を待つ、終末への切迫した危機感である。

ゾシマ長老が用いる「絶滅させる」と「滅亡する」。これらの語も神による「聖絶」を背景としたものであり、人類が至った危機に対する強い危機感が込められていることに疑いはない。だがその特徴はエホバ神が人間を一気に「絶滅させる」という、旧約的な怒りと裁きの神の容赦のない「聖絶」が直接前面に出されたものではない。ゾシマ長老によれば、今や人間は専ら己の知に立ち、己を主とし、己の力に訴え、つまりは「キリストを拒否し」「キリストの約束を忘れる」という重大な過ちを犯しつつある。つまり人間は進んで自らを「僕」とするイエス・キリストが示した「完全な自己犠牲」の道を忘れ、また拒否することによって、「相互絶滅」や「自己滅亡」の運命を招きつつあるのだ。ここには人類が到った危機を冷静に分析し、人類が再び立ち帰るべき原点、「キリストの約束」を提示するゾシマ長老がいる。

「もしキリストを拒否するならば、世界を血の海と化して終わるであろう」。このゾシマの危機感の背後には、合理主義と主知主義に立つ近代西欧文明に対するドストエフスキ自身の痛烈な危機感と批判、そして福音書のイエスに向ける熱い眼が存在すると考えるべきであろう。この二つは『夏象冬記』の旅（1863）以来、人間と世界とその歴史に向かうドストエフスキの視座を構成する基本的な要素となったものである（拙著『^お傾ちた^{にがよもぎ}苦文の星—ドストエフスキと福沢諭吉—』河合文化教育研究所、1997を参照）。

絶対の孤絶と孤高の中で、自らの「罪」と共に裁きの神の前に立ち、その神の「聖絶」に重ねる形で、「己の命を絶滅させる」との結論に至ったスメルジャコフ。彼が遺書に記した「絶滅させる」という語は、他のカラマーゾフの兄弟たちが持つ「絶滅」「壊滅」「根絶」の感覚とも呼応し、また人類が直面する終末についてゾシマ長老が説く危機感とも、更には後に見る「悪業への懲罰」の概念とも連なり、旧約世界の「聖絶」ばかりか、新約世界にも深く根を置くドストエフスキ独自の終末論的概念であることが明らかとなった。

以上のことを視野に収め、次に我々が取り組むべき課題は、父親殺しの決行から遺書を残しての自殺に至るまで、この二か月間スメルジャコフの内では何が起こっていたかを出来るだけ具体的かつ明確に理解することである。「悪業への懲罰」の現前によりスメルジャコフは如何なる神と、あるいはイエス・キリストと直面することになったのか。「絶滅させる」とその同類の動詞群の検討から明らかとなったこととは、スメルジャコフの自殺の内には、ただ旧約的な「怒りと裁きの神」による「絶滅」、絶対的「聖絶」とは異なる、あるいはそれをも含んだ新約的「愛と赦しの神」による「絶滅」の可能性も、つまりは旧

約的新約的両義での「聖絶」の可能性も存在するのではないかということである。

これらの問題について、筆者が直接答えることはまずない。だが第一回目から取り組んできて明らかとなったように、それらは決して全くの闇の底に埋もれた謎というわけでもない。筆者はイワンとスメルジャコフとの三度にわたる対決を提示することで、これら二人がそれぞれの罪意識を介して神と出会うプロセスを見事に明確に描き出している。そしてこの対決こそ、『カラマーゾフの兄弟』後半のクライマックスと言うべきものである。また我々読者はアリョーシャに注目することで、「悪業への懲罰」の現前に曝された二人の兄について、この「実行的な愛」の人が如何なる思いを抱き、また如何なる思索を続けたかを知ることにも促される。二人の兄の対決劇と並行する、これもまた隠れたクライマックスである。筆者が提供する手掛かりは決して少なくはないのだ。以下では「悪業への懲罰」を手掛かりとして、スメルジャコフが向き合った神について更に考えてゆこう。

4. スメルジャコフが向き合った「懼るべき」「活ける神」

— 怒りと裁きの神、愛と赦しの神 —

「悪業への懲罰」

イワンの三度目で最後の訪問の時である。スメルジャコフは、自らが手を下した父親殺しについて、そしてその際味わった恐怖と懼れについて、イワンに詳細克明に語り聞かせる（十一 8、第3章^[4]）。筆者によれば、父親殺しから既に二か月が経ったにもかかわらず、これを語る時の彼は「興奮し、苦しげに息をつき、その顔には汗が浮かんでいた」という。血の一線を踏み越えたパニックから、未だ彼は逃れられずにいたのだ。ゾシマ長老の言う「悪業への懲罰」の現前である。この「悪業への懲罰」について、やや遠回りのようではあるが、まず我々はゾシマ長老自身の体験と言葉に即して、次にはルカ福音書が伝えるイエスの言葉に即して考え、この概念をドストエフスキイ自身が如何に捉えてきたかを踏まえた上で、改めてスメルジャコフに戻ることにしよう。

(1) ミハイルが体験したもの

血の一線を踏み越えるや否や、その人間の良心に罪意識を介して裁きの神が臨むこと。—— この「悪業への懲罰」という概念を、ゾシマ長老は何時如何にして得るに至ったのか。この問いに対する答を得る上で具体的かつ重要な手掛かりとなるのが、アリョーシャが編纂した「ゾシマ伝」の前半に収録された一つのエピソードである。若きゾシマの前に現れた「謎の訪問客」ミハイルの物語だ（六 2 D）。この男は道ならぬ恋が成就せず、相手を殺害してしまったものの、様々な偶然が重なり、その犯行が発覚することのないまま、十四年もの間、社会的名声の裏で一人「地獄」の苦しみを味あわされてきたのであった。犠牲者の「復讐を叫ぶ血が」彼を追って離さなかったのである。だがゾシマを信頼するに至っ

たミハイルが、いよいよその孤絶から抜け出て、自らの罪を明かす時がくる。これに対し、ゾシマの答えはこうであった。「行って、告白をするのです」。ミハイルにも取るべき道は分かっていた。ところがミハイルはその一歩手前までゆきながら、どうしても踏み切ることが出来ない。二人の間に息の詰まるような押し合いが続いた最後の夜のことだ。ゾシマは聖書の一節を相手に示す。「^い活ける^{かみ}神の^み御手に^て陥るは^{おちい}懼るべき哉^{おそ}」(ヘブライ人への手紙十31)。この聖句を示されるや、ミハイルは聖書を放り出し、身体を震わせながら、こう発したとされる。「懼るべき言葉です。一言もありません。よくお選びになりました」。ミハイルは自分をかくも苦しめ続けていたもの、罪意識を介して自らに臨んでいたものが、「懼るべき」「活ける神」であったことを悟ったのだ。この決定的な覚醒、「懼るべき」「活ける神」による「絶滅」体験の後、殺人者は初めて神の「樂園」に招かれ、喜びと平安の内に息を引き取るのであった。

後に見るように(本章^[5])、アリョーシャの編纂になる「ゾシマ伝」の後半で紹介されるのは、様々なテーマに関するゾシマ長老の言説・説教である(六3E-I)。それに先立つ前半部にアリョーシャは「伝記的資料」との副題を付け、若きゾシマとその兄マルケルの、そして今我々が見たミハイルの、「懼るべき」「活ける神」との決定的な遭遇体験を次々に紹介する(六2A-D)。そしてこれらの神体験とは皆、ゾシマ兄弟やミハイルの旧き自己が「懼るべき」「活ける神」によって正に「絶滅」させられる体験であり、そこから彼らが新たな生に生まれ変わらされる体験に他ならない。アリョーシャが「ゾシマ伝」を前半と後半とに分け、師ゾシマの「生涯」と「説教」の二段組によって伝えようとしたのは、何よりもまず「懼るべき」「活ける神」の臨在であり、人間がこの「活ける神の御手」によって死から生へと、根本的に変革される必要と必然であったと言えるであろう。

この「ゾシマ伝」を編纂するアリョーシャが念頭に置いていたと考えられる具体的な出来事を、もう一つ確認しておこう。それは「場違いな会合」の場で(二5)、人間の犯した罪が如何に清算されるかという「教会裁判論」を巡る議論である。第2章^[4]と第3章^[4]で見たように、ここでゾシマ長老はイワンに対し、罪人の良心に罪意識を介して臨む神について、つまり「悪業への懲罰」あるいは「キリストの律法」について諄々と説き聞かせる。我々はこの場にアリョーシャがいたことを忘れてはならないであろう。アリョーシャはこの時の体験を踏まえ、その後父親殺しに踏み込んだイワンとスメルジャコフが、長老の予言通り「悪業への懲罰」に曝されたことを明確に知るのだ。事実これら二人の兄が体験した「地獄」について、アリョーシャが如何に正確に把握していたか、そして如何に強く心を痛めていたかは、この後で彼の祈りを再検討する際に改めて確認しよう。作者ドストエフスキイは、ミハイルにせよイワンとスメルジャコフにせよ、「悪業への懲罰」に曝された罪人たちの心を窺う上で、アリョーシャという最良の導き手を我々に提供してくれているのである。

ここで一瞬、ゾシマ長老やアリョーシャの背後にいる作者ドストエフスキイにも目を向けておこう。周知の如く『罪と罰』は、血の一線を踏み越えたラスコーリニコフが体験さ

せられる懼るべき罪と罰のドラマであり、ドストエフスキイが描く「悪業への懲罰」のドラマの原点とも言うべき作品である。だが『罪と罰』の場合、殺人者ラスコーリニコフに臨む「悪業への懲罰」が全編四百ページ余りを費やして描かれたのに対し、『カラマーゾフの兄弟』のミハイルの場合は、彼の十四年にもわたる苦悩の一切が僅か十ページの内に凝縮され、しかも彼が苦しめられた恐怖と懼れの本質が、ズバリ一つの聖句を以って明らかにされるのだ(「活ける神の御手に陥るは懼るべき哉」ヘブライ人への手紙十 31)。『罪と罰』と『カラマーゾフの兄弟』の間に横たわる十五年近くの歳月は、罪人の良心に臨む「懼るべき」「活ける神」の裁きのリアリティに関して、ドストエフスキイの認識を深めさせ、かつそれを刻む筆をも冴え渡らせたのだ。かくして「悪業への懲罰」という視点から見る時、後期ドストエフスキイ文学とは、作者ドストエフスキイが旧約新約両世界に連なる「聖絶」の概念を、一人ひとりの人間と神との対決のドラマとして内面化させ、また先鋭化させる過程であったと言えるであろう。スメルジャコフのドラマもまた、イワンのそれと共に、ラスコーリニコフから始まるこの「悪業への懲罰」の文脈の内に置かれること、そしてソーニャやリザベータに発しアリョーシャやゾシマ長老に至る磁場とも密接に関わるものであることを確認しておこう。

(2)「殺したる後ゲヘナに投げ入るる權威ある者を懼れよ」

更にここで確認しておくべきは、この「懼るべき」「活ける神」現前のリアリティとは、今見たヘブライ人への手紙もそうであるが、ドストエフスキイが旧約新約両聖書との取り組みから、とりわけ新約のイエスとの取り組みから与えられた最も重要な^{リアリティ}神感覚の一つであった可能性である。とりわけドストエフスキイ世界の「悪業への懲罰」と直結するのは、ルカ福音書が伝える次のイエスの言葉であろう。

「我が友たる^{なんぢ}汝らに告ぐ、身を殺して後に何をも爲し得ぬ者どもを懼るな。懼るべきものを^{なんぢ}汝らに示さん、殺したる^{のち}後ゲヘナに投げ入るる^な權威ある者を懼れよ。われ^{なんぢ}汝らに告ぐ、げに^{これ}之を懼れよ」(ルカ十二4-5)

イエスの言葉として伝えられる、恐らくは最も人の魂を震撼させる言葉の一つであろう。繰り返される「汝らに告ぐ」と「汝らに示さん」。この単純な枠組み自体が既に、「懼るべきもの」が語り出される只ならぬ雰囲気醸し出す。そして「殺したる後ゲヘナに投げ入るる權威ある者を懼れよ」——血の一線を踏み越えた人間の良心に臨み、その存在を根底から裁き去り焼き尽くし「絶滅させる」神。その超越的恐怖感を串刺しにする言葉として、ドストエフスキイは福音書中にこのイエスの言葉を見出し、『罪と罰』以来その創作の根底に置いたと考えられる。この「懼るべき」「活ける神」の圧倒的現前感を前にして、主人公たちは「もうこれ以上どこにも行き場のない」絶体絶命の窮境に追い込まれ、自分が「虱」あるいは「虫けら」たる罪人でしかないことを魂の底から悟らされ、「絶滅」させられてき

たのだ。ラスコーリニコフ像の一つの源泉となったと言われるマクベスの恐怖と狂気も、正にこの「殺したる後ゲヘナに投げ入るる權威ある者」との直面によって引き起こされた底知れぬ恐怖と狂気であったと言えよう（シェイクスピア『マクベス』）。

「活ける神の御手に陥るは懼るべき哉」

「殺したる後ゲヘナに投げ入るる權威ある者を懼れよ」

我々は新約のこれら二つの言葉の内に、「悪業への懲罰」を描くドストエフスキ自身が見出せるであろう。

[筆者はルカの伝えるイエスの言葉が、実は師イエスを裏切り、十字架上に追いやって逃げ去った弟子^{ユダ}たちが、その後に襲われた言語に絶する恐怖感と懼れの感覚を表現したものではないかと考えている。この問題については、改めてまた別の機会に論じたい]。

以下ではスメルジャコフが父の殺害と共に襲われたパニックに改めて戻り、ここを出発点として、彼に臨んだ「懼るべき」「活ける神」に関する情報・データを順次検討し、その「悪業への懲罰」の内実を出来るだけ明らかにするよう努めよう。具体的にはイワンとスメルジャコフとの三度にわたる対決に焦点を絞る作業である。そこからはスメルジャコフに臨む「懼るべき」「活ける神」が、「怒りと裁きの神」以外の相貌を以って、つまり「愛と赦しの神」として立ち現れてくる可能性もあるだろう。

スメルジャコフが向き合った二つの神 (1) 怒りと裁きの神

「悪業への懲罰」、「裁きの神」の現前

フォードル殺害の正に現場で始まった「悪業への懲罰」(十一 8、第 3 章^[4])。これについて語るスメルジャコフは、「神」という言葉こそ用いないが、殺害現場で彼が襲われたものとは、「裁きの神」から殺到する恐怖と懼れであったことは間違いない。と言うのもフォードル殺害から四日が経ち、モスクワから家畜追込町に戻ったイワンが初めて病院を訪れた時のことである。この時スメルジャコフは、他ならぬ「神様」について言及しているのだ(第 3 章^[4])。「今だって、この私たちの話を聞いている者など誰もいません。正にこの神様以外には」(十一 6)。これを、スメルジャコフがイワンに向けて発した冗談とすべきであろうか。ともすると読み過ぎされかねない筆者の記述を注意深く繋げてゆく時、そこに浮かび上がるのは、スメルジャコフの神との直面のドラマである。運命への復讐を遂げるべく父フォードルの脳天に鉄槌を振り下ろした瞬間から、スメルジャコフは「殺したる後ゲ

ヘナに投げ入る権威ある者」の現前に曝され続けていたのだ。

スメルジャコフの激変

スメルジャコフへの「悪業への懲罰」を刻むドストエフスキイの筆は、血の一線を踏み越えたラスコーリニコフ造型以来の内面に食い込むリアリズムを以って、緩急を交えた見事なドラマを刻んでゆく。それは具体的にはイワンとの三度にわたる対決として描かれ、『カラマーゾフの兄弟』後半のクライマックスをなすものである(十一・6・7・8、第1章、第3章)。今見た一回目の訪問に続き、次はイワンが二度目に訪問した後の、スメルジャコフの「激変」とも言うべき変貌に焦点を絞ろう。

二度目の訪問の際イワンは、スメルジャコフから父親殺しに対する自分の罪を完膚無き迄に自覚させられ、パニックに陥ったままカチェリーナの許に飛び込んだのであった(十一・7)。ところが彼女が取り出して見せたのは、父親殺しの意図を明瞭に記すドミートリイの手紙であった。安心して切ったイワンの心から、その後一か月の間、スメルジャコフは追い払われてしまう。その間彼の許には、スメルジャコフが「重い病」にかかり、頭も変調をきたしているとの噂が、また彼は発狂に到るであろうとの見立てを語る医者もいるとの噂も流れてくる。ところがイワンは、これらの噂を一切真面^{まとも}に取り合わなかったのである。この一か月の間に、スメルジャコフには一体何が起こっていたのか。例によって筆者は、直接は何も語らない。我々が「謎の一か月」と呼び、この作品における最も恐ろしい「空白」とする所以である(第3章⁴)。だが、火の無き所に煙は立たず。これらの噂の背後には、間もなく見るように、スメルジャコフの精神を発狂が予測されるまでに錯乱させ、またその肉体を死相が出るほどにまでに衰弱させるような何事かが着実に進行していたのである。

事実、様々な噂に正面からは反応をしなかったイワンも、その噂の向こうにある何事かを無視し通すことは出来なかった。次第しだいに心の底から湧き上がる不安と罪意識に、イワンは自らの心を鎮めようとするかのようにドミートリイの逃亡計画を画策し、彼自身も人格崩壊の兆しを強めてカチェリーナを不安に陥れ、遂には吸い込まれるようにスメルジャコフの許に出かけてゆくのである(十一・5・8)。

訪れたイワンに対し、マリアはスメルジャコフの健康は既に危機的な状況に至っていること、その精神も「ほとんど正常ではない」こと、だが暴れるわけではなく「この上なく静かにしている」ことを伝える。事実、部屋に入ったイワンが目にしたスメルジャコフとは、一か月前の彼とは「すっかり面変わりがし、すっかり瘠せて顔は黄ばんでいた」。また「その目は落ち窪み、目の下には青い隅があった」。死相が出たとも言えるべき相貌で、スメルジャコフは「この上なく静かに」何と向き合っていたのか。

二人の遣り取りの詳細は省略しよう(十一・8、第3章⁴)。この期に及んでもなお要を得ない問いを發し続けるイワン。この若旦那に対し、最初は「嫌悪感」さえ示していたスメルジャコフが、いよいよ決定的な宣告を下す。「では申しましょう、その、あなたが、正に殺

したのです」。それでもなおイワンが示す相も変らぬ鈍感な反応に、今度はスメルジャコフの方が強烈な衝撃を与えられる。「本当に、本当に、今までご存知なかったのですか」。この瞬間である。イワンの眼を覆っていた「懼れ」と「夢」と「幻」が崩れ落ち、その向こうに現れ出たのは、神の前に立つスメルジャコフであった。バラムの眼が啓かれ、神の使者と向き合う驢馬が顕われ出たのだ（本章^[2]）。イワンの言葉は省き、バラムの驢馬・スメルジャコフが語る言葉だけを、第3章（^[4]）に続いてもう一度見ておこう。

「どんな幻もここにはおりません。私たち二人と、その他にもう一人、第三の存在以外には。疑いなくその存在は今ここにいます。その第三の存在は、私たち二人の間にいるのです」（十一9）

「この第三の存在とは、神です。正にこれは神様です。それが今ここに、私たちの傍にいます。ただ、あなたには探しても、見つかりはしません」（同）

憔悴し切ったスメルジャコフが何と向き合っていたのかが、ここに明らかとなる。イワンが一度目に訪問した際に発した「神様」という言葉を、今スメルジャコフは「神」とも、再び「神様」とも、また「それ」とも呼ぶ。この場面から我々が導かれるのは、あの「謎の訪問客」ミハイルが若きゾシマからヘブライ人への手紙を示される場面である。「懼るべき」「活ける神」。——我々もスメルジャコフが示す神を、こう呼んでおこう。イワンとスメルジャコフは共に「懼るべき」「活ける神の御手」に陥ったのだ。

「怒りと裁きの神」と、「愛と赦しの神」

さてこの「懼るべき」「活ける神」から吹き寄せる^{スミノーゼ・トレメンドゥム}超越的恐怖感を前に、スメルジャコフが「己の命を絶滅させる」に至るまで、残された時間はあと僅かでしかない。だがそもそも彼にとって、この「懼るべき」「活ける神」とは如何なる神であったのか。

文鎮で父親の脳天を叩き割った瞬間から襲われたパニック、「悪業への懲罰」を通してスメルジャコフに臨んだ神を、我々は今までただ「裁きの神」とも、旧約的な「怒りと裁きの神」とも、新約のルカが記すイエスの言葉を用いて「殺したる後ゲヘナに投げ入る權威ある者」とも、同じく新約のヘブライ人への手紙が記す「懼るべき」「活ける神(の御手)」とも、あるいは広く言われるように新約的な「愛と赦しの神」とも様々に言い表し、最終的には「懼るべき」「活ける神」と呼ぶに至った。その遺書に記された「己の命を絶滅させる」との表現からは、スメルジャコフの意識にあった神とは、自らの意思に背く被造物を有無も言わず一気に「絶滅させる」「聖絶」の神、まずは旧約的な「怒りと裁きの神」であった可能性が高いと見てよいであろう。スメルジャコフはこの「怒りと裁きの神」の前に立たされ、死相が現われ出るほどにまで憔悴させられ、苦しめられていたと考えるのが、まずは自然であろう。

だが「悪業への懲罰」を介してスメルジャコフに臨んでいたのは、果たしてこの旧約的

「怒りと裁きの神」であったと断言してよいのであろうか。思い起こすべきは、『罪と罰』以来ドストエフスキイが描いてきた「聖絶」の神とは、ただ罪人を「虱」あるいは「虫けら」としての自覚に追い込み、彼らを裁き去り焼き尽くし「絶滅させる」だけではなかったという事実である。ソーニャやラスコーリニコフを始めとしてゾシマ兄弟やミハイルに至るまで、この作者が描いた「聖絶」の神とは、人間を絶滅の底から新たに「樂園」「神の国」に招き入れる「愛と赦しの神」でもあったのだ。また先の「絶滅させる」とその同類の動詞群の検討から明らかとなったように、ドストエフスキイはスメルジャコフを始めとする登場人物たちを、ただ旧約的「怒りと裁きの神」の磁場の内に閉じ込めず、新約的「愛と赦しの神」をも含んだ広い宗教的象徴性を持つ磁場の内に置いているのだ。「悪業への懲罰」を介してスメルジャコフに臨んでいたのも、正にこのように相反する極性において働く「懼るべき」「活ける神」と考えるべきではなかろうか。そしてこの角度からのテータを、事実作者ドストエフスキイは様々に提供しているのである。

「懼るべき」「活ける神」、その極性

この問題の検討に進む前に、我々はまず旧約的な「怒りと裁きの神」と、新約的な「愛と赦しの神」について少し考えておこう。そもそも旧約的「怒りと裁きの神」と、新約的「愛と赦しの神」とを相容れない対立概念として措定し、キリスト教の成立を後者が前者に取って代わったことだと考えること自体が、余りにもナイーブで図式的なユダヤ教とキリスト教の理解と言うべきであろう。旧約の中にも新約的要素は数多くあり、その逆もまた真なのだ。我々が先に取り上げたヘブル人への手紙が記す「活ける神の御手に陥るは懼ろしき哉」も、ルカ福音書のイエスが語る「殺したる後ゲヘナに投げ入るる權威ある者を懼れよ」も共に、新約の内にあつて旧約的な「怒りと裁きの神」の激しさを伝えるものであるが、何ら新約的精神に矛盾するものではない。それらは共にイエスの精神に反するどころか、イエスその人のリアリティを強く正確に映し出すものとして、むしろ本来的な位置を占める表現と言うべきであろう。

イエスとその師たる洗礼者ヨハネを取り上げてみよう。マルコやマタイを始めとして、全ての福音書がその冒頭か冒頭近くで伝えるのは、人々に激しく悔い改めと神への立ち歸りを迫る洗礼者ヨハネの宣教である。この旧約的「怒りと裁きの神」を生きるヨルダン川の洗礼者ヨハネの許に、イエスは弟子入りをしたのだ。そして師がヘロデ王によって殺害された後、新たに「神の国」の宣教を開始したイエスの内に、師ヨハネと通じる激しく厳しい預言者的精神が脈打っていたことは、福音書の様々なエピソードが活写するところである。

その典型的な一つが、ドストエフスキイも『悪霊』のエピグラフに用いた「ゲラサの豚群」の奇跡物語であろう(ルカ八 26-39 // マルコ五 1-20、マタイ八 28-34)。ある男に取り憑いた悪鬼たちを、イエスが二千匹もの豚の内に追いやるや、豚群は直ちにゲラサの湖に雪崩を打って転げ落ち、悪鬼ともども滅ぼし尽される。旧約的な正に「聖絶」とも言うべき、

鬼気迫る悪鬼追放の物語である。この奇跡物語を伝えた人々にとりイエスとは、人間の内なる「悪鬼たち」を有無も言わず一氣に「絶滅させる」懼るべき^{デュナミス}力を持つ存在であり、彼らは何よりもまずイエスが与えるこの圧倒的超越的存在感と恐怖感に心を震撼させられ、「懼れと驚き」の念に打たれたのであろう。神を愛として捉え、あるいは愛の神に捕らえられ、その神の愛を十字架上で惨殺されるまで貫いて生きたイエスを、ただ「愛と赦しの神」を体現した優しく物静かな存在とするのは、生彩のない物静かな宗教的青年というアリョーシャ像を作り上げるのと同じく、余りにも片面的な理解と言うべきであろう。洗礼者ヨハネの弟子として「怒りと裁きの神」を激しく生きると共に、それに劣らず「愛と赦しの神」をも激しく生きたイエスが持つ豊饒で複雑な極性に目を向けずイエス像を創り上げることは、キリスト教の成立について紋切り型の表面的理解の上に立ち、イエスその人が伝えた「神の国」のリアリティから、つまりは「懼るべき」「活ける神」そのものの極性が与える超越的感覚から遠いところに自らを置くことになるであろう。

スメルジャコフは血の一線を踏み越えた後、このような「懼るべき」「活ける神」の両極二相に触れさせられるに至ったからこそ、そして自らの内にも外にもこれら相反する両極性を見出すに至り、それら両者を容易には消化し切れなかったからこそ、最終的な発狂を予想されるほどにまで、しかも死相が現われ出るほどにまで憔悴し切り、部屋で一人「この上なく静かにしていた」のではなかったか。以下ではこの角度からスメルジャコフについて考え、その自死の意味についても考えてゆきたい。

「怒りと裁きの神」と共に、スメルジャコフが触れるに至った「愛と赦しの神」。—— この角度から見ると、事実作者は後者についても、否、後者についてこそ、少なからぬデータを提供していることに気づかされる。ドストエフスキイが描くのは『シリアの聖イサクの苦行説教集』であり(A)、また具体的には既に見てきたように、スメルジャコフの傍らに寄り添う「親切な人々」であり(B)、殊に「実行的な愛」の人アリョーシャである(C)。

スメルジャコフが向き合った二つの神 (2).愛と赦しの神

(A).シリアの聖イサク

「黄色い背表紙の何か分厚い本」

スメルジャコフに臨んでいた「懼るべき」「活ける神」とは、恐怖と懼れを以って臨む「裁きの神」のみではなかったこと。このことを我々に考えさせずにはいない様々なデータが存在する中で、看過してならない第一のものは、スメルジャコフのテーブルの上には「一冊の黄色い背表紙の何か分厚い本」が置かれており、それは『シリアの聖イサクの苦行説教集』だったとされることである。死相が出たとも言うべき相貌で、医師からは発狂さへ予想される「ほとんど正常ではない」精神状態で、スメルジャコフはこの分厚い本を、ただテーブルの上に飾っていただけだ、そして盗み出した三千ルーブリ札の束を一時置く「重

し」のために用いたのだなどと考えるならば、我々は作者ドストエフスキイのメッセージを大きく受け取り損なうであろう。作者が我々読者に、ここから一步踏み込んで考えることを要求していることは明らかである。つまりスメルジャコフが向き合っていた「懼るべき」「活ける神」が持つ両極性の内、「怒りと裁きの神」に対するもう一つの極、「愛と赦しの神」についてである。

『シリアの聖イサクの苦行説教集』。既に見たように（第1章^[4]）、これはグレゴリーイが旧約聖書のヨブ記と『殉教者列伝』と共に、長い間取り組んでいた書物であった。乞食女スメルジャシチャヤがある夜、グレゴリーイ夫婦の赤ん坊の埋葬の夜のことで、自らの命と引き換えるかのようにこの世に産み落としていったスメルジャコフ。この赤ん坊を、これもまた自分たちの赤ん坊の命と引き換えるかのように引き取ったグレゴリーイは、立て続けに襲われた「自然界の混乱」を前にして、「神様のこと」を学ぶべく、これら三つの書物を手に取ったのである。筆者によれば、グレゴリーイは聖イサクの書物を一行も理解出来なかったという。だがそれゆえにこそ、彼にはこれが一層貴重なものであり、この書物を何年にもわたり黙々と読み続けたという。このグレゴリーイを引き継ぐかのように、スメルジャコフは聖イサクの書物を自らのテーブルの上に置いたのだ。

『シリアの聖イサクの苦行説教集』。この書物に記されたこととは「神様のこと」に他ならない。しかもここには「怒りと裁きの神」に対するもう一つの「懼るべき」「活ける神」、即ち「愛と赦しの神」以外の何ものも語られてはいないと言っても過言ではないだろう。

『シリアの聖イサクの苦行説教集』

聖イサクの書物について纏めることは容易でない。しかし敢えて記せば、何よりもまずこの聖者が示そうとするのは、人間の如何なる罪をも超える圧倒的な神の愛についてである。続いて強調されるのは、地上においてこの神の愛を、十字架上の死に至るまで、永遠の真理として証をすべく生きたイエス・キリストと、その十字架に向ける畏れと感謝だ。神とイエス・キリストに続いて、聖イサクが目に向けるのは人間である。この世という穢れた大海にある限り、人間が陥らざるを得ない様々な試練と試み。その試練と試みとに正面から向き合い、自らもイエスに倣い十字架を担う時、その人間に初めて顕われ出るのが神の^{プロビデンス}意図と恩寵の不可思議である。これらのことを核として更にイサクが説くのは、神とイエス・キリストの愛と赦しを前にしても、また歩むべき十字架の道が目の前に示されても、なお人間が陥り続ける罪の深さについてである。またそれゆえにこそこの聖者は、己の罪と過誤に対する絶えざる悔い改めと謙抑の心の必要を訴えるのだ。また人間が神とイエス・キリストの愛に至り、そこに溶け入るための「祈り」の必要と勧告も繰り返され、究極的には祈りを超えた祈り、神を求める人間に与えられる奥深い宗教体験とその感動が語られる。—— 以上のように要約することが可能であろう（シリアの聖イサクについては、拙著『カラマーズフの兄弟論』VII C 5、「補遺」、参考文献Eなども参照されたい）。

聖イサク、そしてゾシマ長老

聖イサクの思想を前にして、直ちに我々に思い起こされるのはゾシマ長老と、その説くところである。人間が犯す如何なる罪をも凌ぐ「神の愛」と「キリストの愛」、これを至高のものとして訴える点で、聖イサクもゾシマ長老も軌を一にすると見えよう。また罪と苦難を介して人間が神の現前に触れ、究極はその赦しと愛という神の摂理^{プロビデンス}の内に摂取され、新たに十字架を担った生を生きるよう促されるとする点で、両者が展開するのは典型的なキリスト教的救済論と言えるであろう。人間が犯す罪に関して、ゾシマが説く「悪業への懲罰」が持つ「裁き」と「絶滅」の激しいドラマ性と較べると、主に隠遁の修道僧たちに向けて語られる聖イサクの説教は「祈り」が強調されて静的であるが、彼の内に燃える信仰の炎はゾシマに劣らず熱い。(ゾシマ長老の思想については、第4章²を参照されたい)。

イワンやスメルジャコフのように、人間と世界の究極の真理、神の存在とその摂理^{プロビデンス}について、最終的な確信に至り得ず、遂には悪魔の「否定の精神」に与^{くみ}しようとする青年たちにとって、聖イサクやゾシマ長老の存在は疎ましいものであると共に、人間を超えた超越的存在とその愛を絶対の確信を以って指し示す存在として、無視し切れぬものがあつたと考えられる。

さてイワンがスメルジャコフの心の奥深くに見出したのは「測り知れぬ」「傷ついた自尊心」であつた。そのスメルジャコフがシリアの聖イサクの書物と向き合い、そこに説かれたことが人間に対する神の無条件の愛であることを知った時、その「傷ついた自尊心」は何を感じたのか。この問題こそが『カラマーゾフの兄弟』と取り組むドストエフスキイがその最深奥に置いた課題の一つであつたと考えられる。そしてこれが我々の最後の課題として取り組みつつある問題である。

スメルジャコフとイサクとの出会い

ところでスメルジャコフは具体的に何時、また如何にして『シリアの聖イサクの苦行説教集』を手にとることになつたのであろうか。思い起こすべきは「場違いな会合」の日の夜、フォードル宅での夕食後のエピソードである。突如棄教者論を展開した「バラムの驢馬」スメルジャコフは、山をも移す「芥子種一粒ほどの信仰」(マタイ十七 20)の困難さについて語り、そのような信仰を持つ人間など「全世界でもせいぜい一人か、多くても二人くらいのものでしかない」と言い放ち、しかもそのような人間も「どこか遙かエジプトの砂漠あたりで密かに修行しているために、彼らを探し出すことなど決して出来はしない」と断言するのであつた(三七、第3章)。スメルジャコフの想像力は祖国ロシアから遠く離れたエジプトの砂漠にまで及び、そこの修道士にして初めて保たれ得る純粋な信仰に思いを馳せていたのだ。彼が養父グレゴリーイの持つ砂漠の修道士聖イサクの説教集を、たとえそれに心を預けることはなかつたとしても、以前から密かに紐解いていた可能性も決して少なくはないと考えるべきであろう。あるいはグレゴリーイが、この本をスメルジャコフに直接与えた可能性もあろう。また修道院にあるこの書物を、アリョーシャが彼の許に

もたらした可能性も否定は出来ないだろう。この書物に関して、筆者は一切記さない。だがいずれにせよ筆者は『シリアの聖イサクの苦行説教集』が、スメルジャコフの死に至る直前まで彼の部屋のテーブルの上に置かれていたと記すのだ。この書物を無視して、イワンと共にスメルジャコフの部屋を立ち去ることは、我々には出来ない。

(B).「親切な人々」

スメルジャコフが触れていた「神の愛」、あるいは「キリストの愛」。この問題について考えるにあたり、聖イサクの書物以外にもう一つ、我々は具体的なしかも極めて重大な事実を忘れてはならないであろう。この若者の周囲にいる「親切な人々」が彼に注いだ愛である。本論の初回、第1章で我々がまず目を向けたのはマリアであり、彼女がスメルジャコフに対して注ぎ続ける愛についてであった。病弱で年老いた母の面倒を見るべく帰郷した彼女が、その母に加えて隣家の下男スメルジャコフに注いだ愛は、彼の死に至るまで一貫した純朴なものであり、我々読者の胸を打たずにはいない。二人の逢瀬の場において、このマリアの前でギターを片手にしたスメルジャコフが見せる気取った態度は、およそ「人間嫌い」で「女嫌い」と言われるスメルジャコフ像とはほど遠い、微笑ましいものでさえある。それは愛する女性との束の間の逢瀬を楽しむ、一人の純朴な若者の姿そのものだ。さもないと、どうして彼が「婚約者」として、病院から直接マリア母娘の新居に引き取られることに同意しようか（十一6）。「悪業への懲罰」の現前によって「懼るべき」「活ける神」と直面させられたスメルジャコフが、シリアの聖イサクの説教集と向き合っていたという事実と共に、その死の時までマリアの愛の磁場の内にいたという事実を、我々は決して忘れてはならない。

スメルジャコフを愛したのはマリアだけではなかった。繰り返し見てきたように、養父グレゴリーイもその妻マルファも共に、宗教的痴愚の乞食女スメルジャシチャヤがその命と引き換えるかのように産み落としていった「孤児」を「神さまの子」として引き取り、聖パウロから採ったパーヴェルという洗礼名まで与え、大切に育ててきたのだ（三2、第1章^[4]）。このことはスメルジャコフ自身も十分に承知していることであった。病院を訪れたイワンから必要なものはないかと問われて、彼はこう答えている。「マルファ・イグナチエーヴナが私を忘れずにいてくれて、必要なものが何かあれば、今まで通り親切に色々と助けてくれます。それに親切な人々が毎日、見舞いに来てくれます」（十一6）。また三度目で最後となったイワンの訪問の際にも、彼はグレゴリーイ夫婦についてこう語っている。「あの人たちは、私が正に生まれ落ちてから、常に優しくしてくれたのです」（十一8）。

スメルジャコフに対するグレゴリーイ。その一見粗暴な態度の裏にあるものとは、創世記を用いての「寺子屋」教育にせよ、ルカの聖句「母の胎を開いた」を用いての叱責にせよ、自分たち夫婦に与えられた「神さまの子」パーヴェルに向ける、尽きることのない愛の表現以外の何ものでもない（第1章^[4]）。

フォードル殺害当日のことも思い出そう。イワンが去った後、いよいよスメルジャコフ

は偽の癲癇発作を起こす。彼の狙いは自分をグレゴリー夫婦の寝室に運ばせることであった。アリバイ作りと前線基地の確保のためである。幼くして癲癇発作を起こした時以来、夫婦は病人を自分たちの寝室に運び入れ、衝立の仕切りで囲った寝台に寝かせ、手厚く看病をしてやっていたのだ。スメルジャコフの悪魔的知力は、育ての親二人の愛を運命の復讐劇のために利用したのである。彼は二人の愛を十分に知っていたのだ。

スメルジャコフの内面に至る道

死相が出るほどにまで憔悴しつつ、スメルジャコフが向き合っていたのは、「怒りと裁きの神」と「愛と赦しの神」の両相を以って臨む「懼るべき」「活ける神」であり、これら相反する神の極性がスメルジャコフの内、互いに深く結びついて絡み合い、また互いに強く退け合い、その心を引き裂いていた可能性。スメルジャコフの心の中で展開していたこの相克・葛藤について、筆者が直接記すことはない。彼の内面について、彼に臨んでいた「懼るべき」「活ける神」の実像について、我々が直接的かつ客観的に知り得る道はないのだ。だが「悪業への懲罰」が臨むスメルジャコフやイワンについて、彼らの弟のアリョーシャが如何なる思いを抱いていたかについて、筆者は少なからぬ情報・データを提供してくれている。それらの情報は、スメルジャコフの心の内を直接伝えてくれるものではない。だが我々は「実行的な愛」の人アリョーシャの心に映し出されたスメルジャコフの姿を、外からとはいえ的確に知ることが出来るのである。これらの像を重ね合わせてゆくことから、兄に対するアリョーシャの思いを知ると共に、そこにはスメルジャコフに臨んでいた「懼るべき」「活ける神」の射影像も、ある程度映し出されることが期待出来るであろう。

(C).「実行的な愛」の人アリョーシャ

アリョーシャ造型上の「破れ」？

スメルジャコフが病院で口にした「親切な人々」。これらの中に、アリョーシャも入るのかどうかについて、筆者は直接何も語らない。また我々が先に第4章全てを充てて辿ったのは、専らイリュージン少年とアリョーシャとの交流であり、少年の苦しみに寄り添うアリョーシャの「実行的な愛」の姿であった（第1章、第4章）。この町に住むもう一人の「罪なくして涙する幼な子」スメルジャコフと、アリョーシャとの交流が前面に出されることはまずないのだ。このため多くの読者が「実行的な愛」の人としてのアリョーシャは認めるものの、スメルジャコフに対しては冷淡なアリョーシャという印象を与えられかねず、実際ここにアリョーシャ造型上の「破れ」を見出す読者や評者も少なくない。だがこれは作者ドストエフスキイが、作品の中心テーマである「実行的な愛」と、それが向けられる「罪なくして涙する幼な子」という基本的対立構図・問題軸と、それを具象化するにあたって用いた戦略とを十分に理解しないことからくる誤解であり、そこから生じる歪なアリョーシャ像と言わざるを得ない。アリョーシャの「実行的な愛」について考えるにあたり、それは次の[5]にまで続くのだが、まずはこれらの点について検討をしておこう。

「実行的な愛」と「罪なくして涙する幼な子」、作品の原構図・問題軸

『カラマーゾフの兄弟』の基本骨格をなす「神と不死」の探求と「父親殺し」と、そして「罪なくして涙する幼な子」たち。「はじめに」で記したように我々は、作者ドストエフスキイがこれら三つのテーマに、それらを受ける形で「実行的な愛」というテーマを置き、これら四つを以って作品の基本的対立構図・問題軸を構成したと考えた。これも「はじめに」で記したのだが、殊に「罪なくして涙する幼な子」たちについてドストエフスキイは、彼らの存在を三層で提示していると考えられる。まず長男ドミートリイを始めとするカラマーゾフ家の四人の兄弟たちであり、また次男のイワンが凝視する地上世界に満ちる受難の子供たちであり、更に家畜追込町という具体的な現実の中に生きるイリュージン少年と、カラマーゾフ家の家長フョードルの非嫡出子スメルジャコフ、これら三つの層である。

これらの中でも、三番目の「幼な子」二人と末弟アリョーシャとの交流を描くにあたってドストエフスキイは、長短と濃淡そして緩急を交えた対照的な戦略・手段を取ったと考えられる。まずイリュージン少年を見てみよう。ドストエフスキイはアリョーシャとイリュージン少年との交流については、イリュージンとコーリヤ二人の少年の交流から始まって、「ジューチカ事件」と「垢すりへちま事件」を経て、エピローグの「告別説教」に至るまで、この少年に関するアリョーシャの認識の深化と、それに応じた「実行的な愛」の行動に沿う形で、クレッシェンド的にまた詳細に、時にはセンチメンタルとも言えるほどの感情移入を以って、描き込んでいるのである(第4章)。

他方スメルジャコフに関しては、アリョーシャとこの異母兄弟との具体的交流の描写は、素っ気ないほどにまで最小限に絞り込まれる。第一回目から何度も確認してきたことだが作者は、スメルジャコフとマリアとの会話をアリョーシャに立ち聞きさせること、そしてマリアをしてスメルジャコフの自殺をアリョーシャに知らせるべく夜の町を疾走させること、これら二つの決定的な出来事にのみ描写を限定させるのだ。つまり作者は、これら異母兄弟の交流に関しては、マリアを介してドラマの大きな枠組みの設定のみに留めたと考えられるのである。しかしそれら二つを刻む描線は太く的確である。

家畜追込町の「罪なくして涙する幼な子」二人と、アリョーシャとの交流に関する対照的な扱い。作家ドストエフスキイが、作品の全体を見据えて創り上げた周到な原構図と、それに沿って作品を具体的に刻む見事な戦略的手腕。ここから我々は、一方から他方を推し測ることで、アリョーシャの「実行的な愛」の内実について、そしてまた二人の「罪なくして涙する幼な子」たちの内面について、様々に推測することを可能とされるであろう。以上のことを念頭に置くことで、スメルジャコフに向かうアリョーシャと、その「実行的な愛」についての考察に進もう。

5. アリョーシャの「ソシマ伝」 — 兄スメルジャコフへの鎮魂歌 —

スメルジャコフの内面に至る二つの道

先に我々が至ったのは、父親殺しの直後から始まった「悪業への懲罰」により、死相が現れるほどにまで憔悴しつつスメルジャコフが向き合っていたのは「懼るべき」「活ける神」であるということ、しかもここには神の相反する両極的な二面があり得るという問題の前であった。「怒りと裁きの神」と「愛と赦しの神」である(本章[5])。だがこの両極性を持つ「懼るべき」「活ける神」の現前と、彼の自殺との間には果たして如何なる関係があるのか、このことは必ずしも明らかでない。「怒りと裁きの神」と向き合うスメルジャコフが、余りもの恐怖と懼れに耐え切れず、あるいは余りもの痛切な悔恨の末に自殺に至ったとするならば、理解はそう困難ではないだろう。だが「愛と赦しの神」との直面と自殺とは、そう簡単には結びつかない。アリョーシャが、このすぐ後で見るように、兄たちに現前しつつある「悪業への懲罰」について察知し、心を痛めていたことは明らかである。だがそもそもスメルジャコフの心の内について、殊に兄に現前する「悪業への懲罰」の内実について、彼はどの程度具体的に知っていたのか。そして如何なる反応をしたのか。我々の前には様々な問題が曖昧なままに残されている。

先に記したように、これらの問題にアプローチする方法として、我々にはアリョーシャを導きとして二つの方法が考えられる。それらは共に「悪業への懲罰」に曝されたスメルジャコフの内面に外から、つまりアリョーシャの視線に沿ってアプローチをするという方法である。第一の方法として我々は、自殺直後のスメルジャコフと人格崩壊間際のイワンについて、アリョーシャが神に捧げた「祈り」を再度検討してみたい(A)。第二は、「ゾシマ伝」最終章の検討である(B)。ここでアリョーシャは、師ゾシマの「自殺者論」と重ねる形で、彼自らの「スメルジャコフ論」を展開していると考えられる。このアリョーシャの編集作業を検討することから、彼の心が捉えたスメルジャコフ像が相当明瞭に浮かび上がってくるであろう。

アリョーシャの「祈り」と「ゾシマ伝」。これら二つのスメルジャコフ像の間には、恐らく少なくとも二か月以上の時間が横たわっている。それ故これらの間には、亡き兄スメルジャコフについての、そして兄に臨んだ「悪業への懲罰」についての、アリョーシャの認識の深まりが反映していると考えてよいであろう。勿論これら二つは共に、飽く迄もアリョーシャの主観が捉えたスメルジャコフ像である。とは言えそれらは、「懼るべき」「活ける神」と向き合う兄スメルジャコフについての、アリョーシャならではの厳しく鋭利な観察と思索が生み出したものであり、少なからず参考となることが期待出来よう。

(A) . アリョーシャの祈り

祈りに至るまで、修道院を出て

アリョーシャとスメルジャコフとの接触・交流について、何度も言及したように、ドストエフスキイはその具体的描写は最小限に絞り込んでいる。アリョーシャによる恋人たちの逢瀬の立ち聞きと、彼の許へのマリアの夜の疾走という、大きな枠組みだけが設定され

るのだ。マリアによって兄スメルジャコフの自殺のことを知らされたアリョーシャは、その同じ夜、神に祈りを捧げる（十一10）。主人公の心の最深奥でなされる祈りが明らかにされるという、ドストエフスキイ文学においても稀有な場面の一つである。この祈りの背景について、殊にそれまでの二人の関係について把握しておくために、少々遠回りとなるが、この時に至るまでのアリョーシャとスメルジャコフの足跡を簡単に辿っておこう。

まずはアリョーシャの行動の大きな流れである。ゾシマ長老の死を契機とする一連の宗教体験から三日後、この青年は修道院を出て、家畜追込町での生活を開始する。「俗世で修道士としてあり」「神の民を愛するのだ」という師の遺訓に従ったのだ。その後の彼は、父親殺しの激震に見舞われる兄弟のイワンとドミートリイばかりか、ホフラコワ夫人とリーザ母娘、仇敵同士のグルーシェニカとカチェリーナ、そしてイリュエシン少年とスネギリョフ一家の許を絶えず訪れ、彼らの傍らに寄り添い、その苦しみや怒りや悲しみ、不安や愚痴、そして喜びや讃歌等々に正面から向き合い続けている。だがこの間の彼とスメルジャコフの関係について、筆者が直接言及することはない。

それ故次に検討すべきは、アリョーシャとマリアとの交流についてである。周知の如く、スメルジャコフによるフョードル殺害は、マリアとの逢瀬の翌日夜のことだ。血の一線を踏み越えるやパニックに陥ったスメルジャコフを、追い打ちをかけるように真正の癲癇発作が襲い、彼は病院に運び込まれる。「悪業への懲罰」の開始である。スメルジャコフの余りにも激しく長い発作は郡会医を驚かせ、この医師は患者の命の危険さえ口にする（九2）。四日の後、モスクワから戻ったイワンが病院を訪れる。だがそれから二週間ほどして彼が再び訪れた先は、スメルジャコフが「婚約者」として身を寄せるマリアの新しい住まいであった。三度目で最後の訪問は、それからまた一か月ほどが経ってからのこと、同じマリアの住まいである（第1章^[2]、第3章^[4]）。

マリアの転居

このスメルジャコフに関する流れを辿ってみる時、アリョーシャがスメルジャコフのことでマリアと初めて語り合う機会があったとすれば、恐らくスメルジャコフの入院中のことであろう。そしていくら注意してもし過ぎることがないのは、退院と共にスメルジャコフがマリアの「婚約者」として、彼女の新居に移り住んだという事実である。既に見たように（第1章^[2]）、カラマーゾフ家の隣家に住み、マルファから毎日パンとスープを恵んで貰うほどの極貧にあえいでいた母娘が、何故、また如何にしてその家売り払い、貧弱とはいえ新しい住まいに、しかも極めて短時間の内に移り住むことが出来たのか。我々はこのアリョーシャの影を見た（第1章^[2]）。病院にスメルジャコフを見舞ったアリョーシャは、たとえこの病人が彼との面会を拒絶したとしても、そして恐らくその可能性は高かったであろうが、少なくとも病人の恋人であり隣家の住人でもあるマリアとは会話の機会を持ち得たであろう。二人の会話について、様々な推測が可能である。だが筆者が記す事実にはのみ目を向けよう。我々の前に提示されるのは、繰り返しとなるが、イワンの病院訪問

から二週間と経たぬ内に、マリア母娘がそれまでの住まいを売り払って新たな住まいに引っ越し、ここにスメルジャコフを「婚約者」として引き取り、新たな生活を開始したという驚くべき事実である。この事実の背後に、アリョーシャの存在以外の何があるろう。

新たに家畜追込町での生活を開始したアリョーシャには、以前の養育者ポレーノフが残してくれた金が利子を含めて二千ルーブリはあり、加えて父の死がやがて莫大な遺産をもたらすであろうことも見込まれた。マリアの引っ越しの物質的条件は満たされていたのだ。

またアリョーシャは、一張羅の装いをした恋人たちが、緑色のベンチで束の間の逢瀬を楽しむ姿を目の当たりにしていた。スメルジャコフに対し、ひた向きに心を傾けるマリア。一方、素っ気ない素振りで彼女に応え、ギターの弾き唄いをするスメルジャコフ。これら二人の間に流れる愛情を見て取れぬほど、アリョーシャは朴念仁の宗教的痴愚ではない。「実行的な愛」の人アリョーシャの内にも、「カラマーゾフの血」は脈々と流れているのだ。ここにも彼がスメルジャコフを「婚約者」という名目の下に、マリアの新居に引き取らせるに十分な条件は存在していたのである。ちなみにアリョーシャの「実行的な愛」について、筆者はこう記す。「彼には曖昧さということが耐えられなかった。というのも彼の愛のあり方は、常に実行的なものであったからだ。受け身の形で愛するということは、彼には出来なかった。ひとたび愛すると、彼は直ちに助けにかかるのだ」(四五)。イリュージョン少年にしたように、彼は「直ちに」マリアを、そしてスメルジャコフを助けにかかったのだ。尤もスメルジャコフ自身はこの時、なお真正の癲癇発作の余波の内にあり、アリョーシャの提案を知らなかったか、たとえ知ったとしても、拒絶をしたと考えるのが無理のないところであろう。恐らく事はスメルジャコフには明かされないままに進行したのであろう。

[マリアとスメルジャコフとが共に去勢派に属するとして、そこからこの引っ越しを説明する立場もあるが(江川卓『謎解きカラマーゾフ』、新潮選書、1991)、本論はそれを採らない。二人が去勢派に属していたと想定し、世の悪魔たる「蛇」を退治すべき、宗教的社会的使命を帯びた「白いキリスト」としてのスメルジャコフ像が打ち出され、この新しい住まいにおける宗教的儀式としての聖なる乱婚までも想定されるのだが、これがアリョーシャやゾシマ長老やシリアの聖イサクが体現する「実行的な愛」、つまり「神の愛」と「キリストの愛」を核とするキリスト教の救済思想に対して、如何なる決定的独自性を持つのかという内在的本質的説明が何ものもなされないまま、この説は異端たる去勢派信徒、「白いキリスト」スメルジャコフ像へのエキゾチックでエキセントリックな関心のみを前面に打ち出しているように思われる。またその一方で、新約聖書の磁場におけるユダとイエスについての考察が何ものもなされないまま、突然「白いキリスト」スメルジャコフをユダだとする立論も、無理があると言わざるを得ない。(『カラマーゾフの兄弟』における聖書

との取り組みについては、拙論「ドストエフスキイ、イエス像探求の足跡 ―ユダ的人間論とキリスト論―」、雑誌『現代と親鸞』第37号所載、親鸞仏教センター、2018を参照されたい]

アリョーシャとイリュージン、そしてスメルジャコフ

以上、修道院を出た後のアリョーシャの行動の流れと、父親殺害後のスメルジャコフの病状の経緯、あるいは「悪業への懲罰」の経緯、そしてアリョーシャとマリアとの交流の可能性について、簡単ながら確認した。忘れてならないことは、これらと並行してイリュージン少年とアリョーシャとの間で進行していたドラマである。

第4章で見たように、アリョーシャはスネギリョフ家の「穴倉」を「毎日」訪れ、イリュージン少年の怒りと悲しみと苦悩に寄り添い続けている。イリュージンとの交流ばかりか、コーリヤを始めとする少年たちとアリョーシャとの交流を描くドストエフスキイの筆は、「エピローグ」における「告別説教」に至るまで木目が細かく、また愛情に満ちたものだ。この事実を一方に置く時、作者がこの「実行的な愛」の人アリョーシャをして、たとえ面会は拒絶されたとしても、スメルジャコフの許をも「毎日」足繁く訪れる「親切な人々」の一人として設定していなかったと考えることは、不自然と言うべきであろう。ましてこれら二人の異母兄弟の交流・接触について、作者は描き忘れていたのだとか、無視したのだなどと考えることは、不自然であるどころか、論外と言うべきであろう。殊に「死の床」にあるイリュージンの苦悩は、「垢すりへちま事件」を始めとする少年の不幸な境遇に由来するところも少なくはないが、直接はジューチカ事件への罪意識によるところが大きいのだ（第4章^[5]）。この少年を日々見舞うアリョーシャが、少年を唆し仔犬のジューチカにピン入りのパンを飲み込ませた兄のスメルジャコフを、どうして忘れたり無視したりすることがあろうか。犬殺しどころか、アリョーシャは一貫してこの兄が、父親殺しの実行犯であることを信じて疑わなかったのである（十一6、十二4）。しかもフォードル殺害の前日、アリョーシャはスメルジャコフとマリアとの逢瀬の現場に偶然居合わせ、この兄が自分の理不尽で醜悪な運命ゆえに、グレゴリーを始めとする世の一切を呪い、更にはイエスキリストに痛烈な呪詛の言葉まで投げつけるのを耳にしていたのである（五2）。アリョーシャの心に、スメルジャコフが痛みと共に住み着いていたと考えることは自然であるばかりか、この作品の核心を理解する上で、決定的に必要なことであろう。そして事実ドストエフスキイは、父親殺しの罪にそれぞれの形で苦しめられる二人の兄、「悪業への懲罰」に曝されるイワンとスメルジャコフが、アリョーシャの心の内で如何に捉えられていたかを、はっきりと我々読者に知らせもするのだ。それがアリョーシャの祈りである。

アリョーシャの祈り

アリョーシャの祈りの内に捉えられ、表現されたイワンとスメルジャコフを見てみよう（十一 10、第3章^[6]）。この祈りの時、既にスメルジャコフは自殺しており、駆けつけたマ

リアからこのことを知らされたアリョーシャは、彼女と共に現場に直行し、その遺書も読んでいます。この間イワンは、悪魔の登場によって意識を錯乱させられ、人格崩壊の寸前となっている。スメルジャコフ自殺の報を持ってイワンの許に駆けつけたアリョーシャは、漸く兄を落ち着かせて寝かしつける。筆者が報告するのは、この後のアリョーシャの祈りと瞑想である。二人の兄の「病気」のことで、アリョーシャが如何に心を痛めていたか、また同時に彼が如何に冷静に厳しく事態を把握していたかが明らかとなる。第3章〔6〕に続いてもう一度、彼の祈りを確認しておこう。

「彼[アリョーシャ]にはイワンの病気のことが分かって来た。《誇り高い決心の苦しみだ。深い良心なのだ！彼の信じなかった神とその真実が、未だ従うことを欲しない心を征服しようとしていたのだ》。《そう》、既に枕に横たえたアリョーシャの頭の中を、このような考えが掠めた。《そうだ、スメルジャコフが死んでしまった以上、兄の供述を誰も信じはしないだろう。だが兄は出かけて行き、供述をするだろう！》。アリョーシャは静かに微笑んだ。《神様が勝つのだ！》。こう彼は考えた。《真実の光の中に立ち上がるか、あるいは・・・信じていないものに仕えたがために、自分と全ての人間に恨みを晴らしつつ、憎悪で滅亡する^{バギーブヌチ}かだ》。アリョーシャはこう悲痛な気持ちで付け加えると、再びイワンのために祈るのであった」

(十一 10)

「神様が勝つのだ！」。罪人の良心に臨む神の怒りと裁き。イワンにおいて、いよいよこの「悪業への懲罰」(二5)が終わりに近づきつつあること、「キリストの律法」(同)が兄の内に現前しようとしていることを、アリョーシャは確信したのだ。事実その翌日イワンは法廷で、神と世を前に見事な「供述」を成し遂げ、人格崩壊と共に「死の床」に沈むであろう。新生への展望を含んだ、終わりの時の始まりである。

同時にアリョーシャの心が向かうのは、もう一人の兄スメルジャコフである。「信じていないものに仕えたがために、自分と全ての人間に恨みを晴らしつつ、憎悪で滅亡する」。スメルジャコフが遺書で用いた「己の命を絶滅させる^{イストレブリャーチ}」が、アリョーシャの心で響き続け、「滅亡する^{バギーブヌチ}」となって表現されたと見てよいであろう。この直前、マリアと共に壁にぶら下がったスメルジャコフを目の当たりにし、その遺書に接したアリョーシャは、この兄がイワンとは逆に、「信じていないもの」、即ち悪魔の手に渡り「滅亡した」と考えたのだ。アリョーシャにとり、兄スメルジャコフが叩きつけた運命への「恨み」と「憎悪」、そしてイエスと「神と生命への呪い」(六3I、後述)は、それほどまでに激しいものであり、その末に彼が選び取った死は、それだけ一層懼ろしく痛ましい衝撃だったに違いない。ここにいるのは、二人の兄の「病気」について冷静に、しかも厳しく見つめ続けるアリョーシャである。そしてこの時のアリョーシャは、神の手に摂取されようとしている兄イワンとは対照的に、もう一人の兄スメルジャコフは悪魔の手に渡ったまま、「自分と全ての人間に恨

みを晴らしつつ、憎悪で滅亡する」に至ったと考えたのだ。

「十字架への道」と「絞首台への道」

話が前後するが、次に確認すべきは、アリョーシャの祈りに先立つ錯乱状態の中で、イワンが発した二つの言葉である。その支離滅裂な饒舌の中でイワンはアリョーシャに向かい、スメルジャコフが「絞首台」への道を選んだのに対し、自分は「十字架」への道を選んだと口にするのだ。

「明日は十字架で、絞首台ではない。否、俺は首を吊ったりはしない！お前は知っているな。俺は決して自殺など出来はしないことを、アリョーシャ！卑劣さからだろうか？俺は臆病ではない。生への渴望からなのだ！何故俺はスメルジャコフが首を吊ったということを知っていたのだろうか？ そうだ、これはあいつ[悪魔]が言ったのだった・・・」(十一10)

「十字架」への道と「絞首台」への道。人格崩壊の崖を転げ落ちながらもイワンは、自分たち父親殺しの兄弟二人が歩む道を既に的確に把握していたのである。これは「悪業への懲罰」が臨む二人の罪人の運命を理解するために、作者がイワンを介して我々読者に与えた、大きな手掛かりと考えるべきであろう。

イワンはスメルジャコフが「絞首台」への道を選び取ったのに対して、自分が「十字架」への道を取るのには「卑劣さ」からでも「臆病」だからでもなく、内なる「生への渴望」からだとする。己の内に脈打つ「生への渴望」を正面から生きること、それは「卑劣さ」などではなく、己の十字架を負って生きることであり、己のカラマーゾフ的「生への渴望」の浄化と聖化への道に他ならないことを、イワンは解体しつつある意識の中で確かに捉えていたのである。大審問官に対するイエス・キリストの接吻と重ねられたアリョーシャの接吻に、イワンが一瞬与えられたあの感動と覚醒が（五5、第3章^[1]）、彼の内ではなお生き続けていたのだ。「聞け、兄弟イワンは全員を超える。生きるべきは彼で、俺たちではない。彼は回復する」。エピローグに置かれたこのドミートリイの言葉は、イワンの没落を正確に捉え、かつその未来を的確に予言するものと考えられるべきであろう（第3書^[3]、本章^[6](3)）。

一方、「絞首台」への道、マタイ福音書が記すユダの道を選び取り（マタイ二十七 3-10）、既に死の向こうへと去ってしまったスメルジャコフ。ではスメルジャコフはアリョーシャの中で、悪魔の手に渡り「憎悪で滅亡する」に至った人間として整理をされ、永遠に忘れ去られるのであろうか。亡き兄について、アリョーシャが祈りで表明した言葉は、読む者にそのような思いを抱かせるほど、冷徹で厳しいものがあると言わざるを得ない。

だが逆である。アリョーシャはこの「絞首台」への道を辿った兄を忘れるどころか、その死後も彼と正面から向き合い続けるであろう。「信じていないものに仕えたがために、自

分と全ての人間に恨みを晴らしつつ、憎悪で身を滅ぼす」。祈りの中でこう表現したアリョーシャは、なお師ゾシマ長老の自殺者に関する言説を参照しつつ、亡き兄について冷徹で厳しい考察を続けるのだ。そして亡き兄の内面の葛藤そのものについては知り得なくとも、兄の生と死を見据えた思索の見事な結果を、彼自身の編集した「ゾシマ伝」の最終章で示すであろう。我々の最後の作業は、このアリョーシャによる「ゾシマ伝」の分析である。

(2)．「ゾシマ伝」

「ゾシマ伝」との取り組み

アリョーシャが「神に召されし苦行修道僧ゾシマ長老の生涯より」、つまり「ゾシマ伝」の編集に本格的に着手した時期について、筆者は何も語らない。詳しい考察は省くが、ここにはゾシマ長老とフォードルの立て続けの死が呼び起こした様々な事件の反映も認められる。恐らくアリョーシャが「ゾシマ伝」に正面から取り組んだのは、これら家畜追込町で起きた事件が一段落した後、つまり二人の死から二か月後の裁判が終了し、イリュージン少年やスメルジャコフの葬儀と埋葬が終わってから後のことであろう。アリョーシャはリーザに対して、自分は二人が結婚する前に、長老の死後直ちに修道院を出て、学業を続け、試験にも合格する必要があると語っている(四四)。それを受けるかのように、それから二か月後、イリュージン少年を埋葬した後の「告別説教」の際、彼は少年たちに向かい、自分はこれから直ちに町を出て、長い間帰らないであろうと告げている(エピローグ3)。家畜追込町を離れ、恐らくは新たに開始された学業生活の中で、アリョーシャはゾシマ長老が生前に語った言葉のメモと向き合い、また記憶に残る師の言行を思い起こし、それに家畜追込町に吹き荒れた様々な嵐を重ねつつ、「ゾシマ伝」の編集に取り組んだと考えるのが妥当なところであろう。それゆえこの「ゾシマ伝」は人間と世界とその歴史、また神とイエス・キリストについての師ゾシマの言説を土台とし、アリョーシャ自身の家畜追込町における体験と考察が織り込まれ、複雑で多層的な構造を持つ小冊子となったのである。そしてこの多層的で奥深い構造そのものが、正にアリョーシャが学業生活に求めたものであり、「ゾシマ伝」とは、アリョーシャが自身の愛と信と知を更に深め確かなものとすべく開始した、新たな生が生んだ「初穂」であると言えるであろう。彼が亡き兄スメルジャコフについて続けた思索と祈りの成果が提示されるのも、ここである。

【この「ゾシマ伝」の成立と福音書の成立との間にある類似性、またそれらの間にある構造的・内容的な対応の検討、更には「第五福音書」としての「ゾシマ伝」の位置づけという問題。これらは、ゾシマ長老を師とするアリョーシャの思想形成のあり方を明らかにする上で、更に広くはドストエフスキイにおけるキリスト教思想を理解する上で、大きな鍵となるものと思われる。福音書の成立に関して聖書

学が積み重ねてきた伝承史的・編集史的分析の作業を中心とした成果に学びつつ、「ゾシマ伝」の成立と正面から取り組むことを将来の若者たちに期待したい。

以下の「ゾシマ伝」最終章についての考察も、その土台作りのささやかな試みである。また「第五福音書」としての「ゾシマ伝」については、拙論「ドストエフスキイにおけるイエス像」大貫隆・佐藤研編『イエス伝研究史』所載、日本基督教団出版局 1998 も参照されたい]

「ゾシマ伝」最終章、その構成

「ゾシマ伝」最終章のタイトルは、「地獄と地獄の業火について、神秘的考察」である(六3 D)。アリョーシャは亡き師の生涯とその言説を纏めた「ゾシマ伝」の正に最後の最後に、以下で見るように、亡き兄スメルジャコフとの取り組みの総決算とも言うべき一章を置いたのだ。これは死の彼方に去った兄スメルジャコフについて、その内面を知り得ぬままに、なお厳しい思索を続けたアリョーシャの愛と認識の探求の報告書であり、また「神と不死」を求める「ロシアの小僧っ子」アリョーシャ自身の、死を超えた「永遠の生命」との取り組みの報告書とも言うべき一章である。

我々はこの一章が、以下のような四つの段階で構成・編集されたと考えたい。——つまりアリョーシャは最終章と取り組むにあたり、まず師が生前に語った「愛」に関する説教を取り上げて全体を貫く核とし(①)、これに福音書を用いて付加的説明を加え(②、②´)、ここから兄スメルジャコフの自殺について考察をすべく、師の「自殺者論」を接続させ(③)、最後にそれに、彼自身のスメルジャコフの生と死に関する考察の結果を重ねた(④)。これら四つの段階である。

このアリョーシャによる編集作業、言い換えればアリョーシャが織り成したテキストの多層性に注目する時、そこからは人間の生と死、そして「神の愛」と「キリストの愛」に関するゾシマ長老の思想の核心が自ずと浮かび上がり、またこの師ゾシマの思想に沿いつつ、亡き兄スメルジャコフについて考察を続けるアリョーシャの思考のプロセスも見えてくるであろう。更にはここからスメルジャコフその人の思想骨格も、その内部そのものというよりはアリョーシャの心に映し出された形ではあるが、相当明瞭となるであろう。更にはスメルジャコフが「悪業への懲罰」によって直面させられた「懼るべき」「活ける神」もまた、ある程度その具体的なリアリティを浮き彫りにすることも期待されよう。

「ゾシマ伝」最終章、「愛」について、[編集①]

「ゾシマ伝」最終章、冒頭の二行である。

「地獄とは何か？」

それは最早二度と愛することが出来ないという苦しみだ」(六三I)

テーマは明確である。「地獄と地獄の業火について、神秘的考察」。タイトルは長くて激しく、そしておどろおどろしい。だが一読して明らかなように、この一章が扱うテーマはただ一つ、「愛」についてなのだ。

続いてアリョーシャは、ゾシマ長老の愛についての教えを詳しく紹介する。—— この地上に存在するにあたり、人間が与えられたのは「我存す、ゆえに我愛す」と自らに言い得る能力であった。この地上で「活きた、実行的な愛」の瞬間が、人間に「一度だけ、たった一度だけ」与えられたのである。ところが人間が実際にしたこととは、「この上なく貴重な贈り物を拒み、その価値を認めず、愛さず、嘲笑的に一瞥を与え、情け知らずのままに留まる」ことでしかなかったのだ。

アリョーシャは、師ゾシマが日頃人々に説いていた愛の教えを、それに背く人間への非難と警告と共にここに採り入れ、それに重ねる形で、亡き兄と兄に向けられた様々な愛について考えていたのであろう。兄の育ての親グレゴリーとその妻マルファの愛、「婚約者」マリアとその母の愛、アリョーシャ自身の愛、そして何よりも「神の愛」と「キリストの愛」……。兄スメルジャコフは、これら自分に向けられた愛という「この上なく貴重な贈り物を拒み」、運命への復讐の鉄槌を下した末に、自らを孤絶の内に閉じ込め、その果てに「己の命を絶滅させて」しまったのだ。

スメルジャコフの自殺直後の祈りにおいて、亡き兄を見つめるアリョーシャの視線は厳しいものであった。この時兄は、「信じていないもの」悪魔の手に自らを委ね、「滅亡した」と捉えられていた。この「ゾシマ伝」においても、兄の死を見つめる視線の厳しさに変わりはない。だがゾシマ長老の説教を重ねることによって、兄を見つめる彼の目は、祈りの場合より一層冷徹で厳しいものとなり、次元を異にするものとなったと言えるであろう。少なくとも二か月以上の時間的懸隔がアリョーシャをして、師の教えに重ねて、亡き兄スメルジャコフを新たに愛という視野の下に考察することを可能にし、更には自らに向けられた愛を斥けて命を絶った不幸な人間として捉えさせるに至ったのである。

「ラザロと金持ちの譬え」、[編集②]

次にアリョーシャが採り上げるのは、ルカ福音書の「ラザロと金持ちの譬」(十六 19-31)であり、この譬え話に関するゾシマ長老のユニークな解釈である。ここで兄のスメルジャコフは、①で自らに向けられた愛を拒んで死んだ人間として捉えられたのに加え、更に師ゾシマの譬え話の解釈の中に捉え直される。編集①に対する②、敷衍の段階と言えよう。この②では「地上での生活」を愛なくして終わった人間の後悔が、「ラザロと金持ちの譬え」を土台として様々に語られる。だがこの譬え話自体が十分に紹介されるわけではなく、福音書でこの話に触れていない場合には、②の内容はやゝ捉え難いものとなる恐れがある。まずはルカ福音書でこの譬え話を確認しておくことにしよう。

この譬え話の主たる登場人物は金持ちの男と、貧乏人のラザロと、そしてユダヤ民族の父アブラハムである。地上で貧困に喘ぐラザロとは対照的に、金持ちの男は贅沢三昧に耽っていた。男は死んで黄泉に送られ、苦しみ悶える。だが彼が気づくと、ラザロは今やアブラハムの懷に抱かれ、慰めを与えられている。生前の行いに応じた厳しい報いが黄泉で待つことを知るや、金持ちであった男はアブラハムに、まだ地上にいる兄弟たちの許にラザロを送ってくれるようにと乞い願う。彼は考えたのだ。もし死人から甦ったラザロが警告をしてくれるならば、兄弟たちは生ある今の内に悔い改めるだろう。しかしアブラハムは彼の願いを聞き入れない。「もしモーセと預言者^{よげんしや}とに聴かずば、たとひ死人^{しにん}の中より甦^{よみが}へる者^{もの}ありとも、其の勸^{すすめ}を納れざるべし」(十六 31)。この金持ちの男がそうであったのと同様に、世の人間は誰もが皆、地上で生ある間は、「モーセと預言者」に耳など貸すことなどまずしないのだ。

この譬え話は金持ちの男と貧乏人ラザロ、地上と天上の生を対照的に扱っていることから、普通はまず、人間が神に拠るべき生を忘れ、富や私欲に溺れてしまうことへの警告として捉えられるであろう。だがゾシマ長老はこの譬えを、地上に生ある間に愛と無縁でいる人間、「活きた、実行的な愛」を斥けてしまう人間たちへの警告として、そしてそれからの立ち帰りを促す譬えとして、日頃人々に語り聞かせていたと考えられる。長老にとって、「モーセと預言者」に耳など貸さないのが人間であり、「神の愛」と「キリストの愛」からの離反とは、人間が全歴史を通して飽くことなく繰り返してきた現実なのだ。ここにいるのは師ゾシマの解釈に即し、亡き兄スメルジャコフを金持ちの男と重ねて思索するアリョーシャであると考えてよいだろう。アリョーシャは兄スメルジャコフの生と死とを福音書の磁場に置き、「神の愛」と「キリストの愛」からの離反の生と死として捉えているのだ。

では「神の愛」と「キリストの愛」から離反してしまった人間の立ち帰りの可能性はどうなるのか。地上で「一度だけ、たった一度だけ」与えられた「活きた、実行的な愛」の機会を拒んだ兄スメルジャコフは、金持ちの男と同じく、愛なき永遠の「地獄」を運命づけられているのであろうか。この問いに答えるかのように、アリョーシャが続いて記すのは、人を愛することなく死んだ者も、なお天上的な愛に近い愛には触れ得るのだというゾシマの教えである。ゾシマによれば、自分に向けられた愛に報いることなく死んだ者たちも、天上の義人^{ただしきもの}たちの愛を受け容れるに至る時、その従順さと謙虚さの中には、地上で軽蔑した「実行的な愛」の似姿の如きもの、それと似た行為の如きものは認められるであろう。—— この部分は地上の生活を愛なくして終えた「金持ちの男とラザロの譬え」②を受けて、ゾシマの愛に関する説教①と繋がる、ゾシマの新たな愛の説教②と位置づけてよいであろう。この編集の背後に居るのは、既に地上の生命を「絶滅させる」道を選び取ってしまった兄を、その死の彼方にまで追い駆けてゆき、兄を包んでいた、そして今も包む愛について、あの金持ちの男が気づいたように兄も気づき、新たにその愛の内に立ち帰る可能性に思いを凝らすアリョーシャ、師ゾシマの教えに拠り、死を超えた「永遠の生命」を求める「ロシアの小僧っ子」アリョーシャである。

アリョーシャが「ゾシマ伝」に大きな転調を施すのはここからだ。②から③へ。愛を知らずして死んだ、そして死後に後悔をした金持ちの男の話を受けて、愛を正面から斥け、自ら進んで死を選び採った不幸な人間、「自殺者」へと話に移されるのである。

自殺者への「愛の祈り」【編集③】

以下③は自殺者に捧げるゾシマの、いわば「愛の祈り」である。

「おお哀れなるかな、地上でわれと我が身を^{イストレビーチ}絶滅させたる者よ。おお哀れなるかな、自殺者よ！我が考えでは、誰もこの者たち以上に不幸な者は最早あり得ないと言えるであろう。彼らのことを神に祈るのは罪であると人は言い、見たところ教会も彼らを斥けているかのようである。だが私は、彼らのためにも祈ることは差し支えあるまいと心の奥底で思っている。というのも、愛に対してキリストも怒りはしないであろうから。このような人たちのことを、私は全生涯を通じて心密かに祈って来た。神父諸兄よ、このことを私は告白する。そう今も日々私は祈っている」（同上）

繰り返される「おお哀れなるかな」。師ゾシマの言葉に重ねられた、アリョーシャの亡き兄への祈りが漏れ聞こえてくるようである。神とその愛に命を委ねず、己の命を私物化し、自ら己の命を断ち切るといふ、人間が越えてはならない一線の踏み越えをしてしまった「不幸な者」たち。修道院にいた頃アリョーシャは、この不幸な「自殺者」たちのためにも、否、彼らのためにこそ捧げられたゾシマ長老の「神の愛」と「キリストの愛」への信と祈りに、心から感動させられたのであろう。

そのアリョーシャの感動が、師ゾシマの言葉に一つの改竄を施した可能性も考えられる。「絶滅させる」である。彼は師が用いた語、例えば先の④（4）で見た「滅亡^{イストレグリアチ}してしま^{イストレビーチ}う」や、次の④で見る「根絶^{イストレグリアチ}させる」などに代えて、敢えて兄スメルジャコフが遺書に記した「絶滅^{イストレグリアチ}させる」を用い、「地上でわれと我が身を絶滅させたる者」と刻んだ可能性も考えられるのだ。尤も先の④（4）では、「滅亡^{イストレグリアチ}してしま^{イストレビーチ}う」と共に「絶滅^{イストレグリアチ}させてしま^{イストレビーチ}う」も二度用いられている。元々ゾシマ自身が「絶滅させる」を使用した可能性も否定は出来ない。いずれにせよ、「絶滅させる」という兄の死にまつわる懼ろしくも悲しい言葉が、「自殺者」に対するゾシマ長老の愛に満ちた説教・祈りと重ねられ、アリョーシャによる亡き兄スメルジャコフへの愛の祈りとなったことは確かである。

「ゾシマ伝」最終章、最後の一節、【編集④】

「ゾシマ伝」最終章、最後の一節を取り上げよう。なおこの一節が、今の③における引用と共に、主人公たちが用いる「絶滅させる」とその同類の動詞群を扱った本章の③で、後に取り上げることにしておいた部分である。

「正に地獄にあって、既に論駁の余地なき認識を得ながら、また否定出来ぬ真理を
 観照しながら、依然傲慢で残忍な者たちがいる。つまり悪魔とその傲慢な精神に
 全面的に与^{くみ}した恐るべき者たちがいるのだ。彼らにとって地獄とは、既に己の意
 志で飽くことなく求める場なのであり、既に彼らは己の好みでなった受難者なの
 だ。と言うのも彼らは神と生命とを呪うことで、己を呪ったからである。彼ら自
 ら、まるで飢えた者が荒野で他ならぬ己の体から己自身の血をすすり始めるよう
 に、己の憎悪に満ちた傲慢さで己を養っている。だが永遠に飽くことを知らず、
 赦しを拒み、彼らに呼びかける神を呪うのだ。活ける神を憎悪なくしては観照で
 きず、活ける神が存在しなくなることを要求し、神が神自身とその全創造物とを
根滅^{ウニチュタジーチ}させることを要求する。そして彼らは己れの怒りの炎の中で永遠に燃え続け、
 死と無とを渴望する。だが死を受け取ることはない・・・」(六3I)

『カラマーゾフの兄弟』の中で、またドストエフスキイの全作品中で、これほど激しく
 「神と生命への呪い」を表現する人物たちが、あるいは「死と無とを渴望する」「恐るべき
 者」たちが、他に描かれたことがあっただろうか。「活ける神」からの呼びかけも赦しも拒
 み、その「活ける神」が「神自身とその全被造物とを絶滅させる」ことをさえ要求する「傲
 慢で残忍な」精神。これはイワンが「地質学的変動」で表現した「否定の精神」に匹敵す
 る、否、それを遥かに凌ぐ懼るべき憎悪と呪詛に満ちた精神であり、正に悪魔的「否定の
 精神」と呼ぶ以外にないであろう。大仰な表現を重ねることになるが、これはドストエフ
 スキイ文学ばかりか、世界の文学・思想・宗教の極北に位置する悪魔的精神と言うべきも
 のであろう。

ゾシマ長老は、神に対して神自身と万人万物一切の死を要求するこのような悪魔的人物
 たちと出会い、あの「謎の訪問客」マルケルの場合のように、彼らとの間で生死を賭けた
 対決を重ねたのであろう。更にゾシマはその相手が、「死と無とを渴望」した末に、遂には
 自らの命を「根滅^{ウニチュタジーチ}させる」という悲劇にも少なからず遭遇してきたに違いない。この師に
 よる「自殺者論」を土台とし、アリョーシャは亡き兄の生と死と向き合い、思索を続けた
 と考えられる。そしてアリョーシャの心が最終的に結んだのが「悪魔とその傲慢な精神に
 全面的に与した恐るべき者」、「神と生命とを呪うことで、己を呪った」人間というスメル
 ジャコフ像だったのだ。それにしても厳しいスメルジャコフ像である。

「信じていないものに仕えたがために、自分と全ての人間に恨みを晴らしつつ、憎悪で
 滅亡する」。―― これはアリョーシャが祈りの中で表現した、自殺直後の兄スメルジャコ
 フ像である。これもまた冷徹で厳しいスメルジャコフ像だ。この祈りから「ゾシマ伝」最
 後の一節に至るまで、一貫して厳しく冷徹な認識に立つアリョーシャのスメルジャコフ像
 は、「自殺者」たる亡き兄についての情け容赦のない批判、痛烈な弾効とさえ響きかねない。
 殊に最後の一行である。「だが死を受け取ることはない・・・」。スメルジャコフは最後の

最後で、弟アリョーシャから冷たく突き放されたかのようにあり、彼は死を与えられることなく、永遠に「地獄」の内で苦しみ続けることを宣告されたかのである。

だがアリョーシャの編集の手順を確認しながら「ゾシマ伝」最後の一章を辿ってきた我々には、この最後の一行もまた、亡き兄スメルジャコフに対するアリョーシャの愛の高らかな表明であり、その最後のクライマックスであることは明らかだ。兄が「己自身の意志と好みによって」選び取った「地獄」も、そして「受難者」たる地位も決して与えられはしないこと。また「己れの怒りの炎の中で永遠に燃え続け、死と無とを渴望」した兄スメルジャコフに、その「死」も「無」も決して与えられはせず、逆に死を超えた「永遠の生命」が待つこと、彼は愛の内に取り込まれていること。——「ゾシマ伝」最後の一行とは、このことを伝える最終通告であり、兄スメルジャコフの悲劇的悪魔的な生と死の一切を包み込んで発せられた、アリョーシャによる「告別説教」であり、愛に満ちた「鎮魂歌」とも言うべきものである。

リアリズムを支える愛

「悪業への懲罰」が臨むスメルジャコフの心の内に触れることも、寄り添うことも叶わず、イリューシン少年の場合とは違って、ただ外から心を痛めるしかなかった「実行的な愛」の人アリョーシャ。彼がその祈りと「ゾシマ伝」で描き出した二つのスメルジャコフ像は、共に悪魔の「否定の精神」に自らを譲り渡し、「破滅」を運命づけられた存在として捉えられ、この上なく厳しい肖像画となったのであった。だがそれらは、亡き兄を凝視するアリョーシャが捉えた在りのままの兄の姿であり、そこに誤魔化しの描線は一本たりとも入ることはない。そしてこの厳格なリアリズムの上に立つからこそ、そしてマリアやグレゴリー夫婦や彼自身を含めた「親切な人々」の愛、そして「神の愛」と「キリストの愛」に至るまで、兄に注がれる様々な愛の究極の力を確信するからこそアリョーシャは、兄がかくまでも望んだ「死」も「無」も決して与えられることはないこと、兄が捕えられた悪魔の「否定の精神」が、イワンの場合と同じく、最終的に敗北することをはっきりと宣言することが出来たのだ。第4章に続いて我々がここに認めるのは、「実行的な愛」の人アリョーシャの、言葉の真の意味での「強さ」である。

「観照者」の運命

ここで筆者がクラムスコイの名画「観照者」と重ねて、スメルジャコフについて論じていたことも思い起こそう（三六、第2章^[3]）。筆者は「観照者」スメルジャコフの未来について、彼が「ことによると放浪と魂の救済のため、突然一切を放棄してエルサレムへと出かけて行ったり」「ことによると突然故郷の村を焼き払ったりすることもある」と述べ、更に「場合によってはその両方が一度に起こるということもあり得るだろう」と記していた。今改めて振り返ると筆者のこの記述は、作品の構成上決定的な意味を持つメッセージであり、予告・予言とさえ言うべきものであったことが明らかとなる。事実筆者の言葉通

り、スメルジャコフは「突然故郷の村を焼き払い」「突然一切を放棄してエルサレムへ」と旅立ってしまったのだ。

ここから「ゾシマ伝」最後の一章、最後の一節、最後の一文にもう一度目を向けてみよう。「だが死を受け取ることはない・・・」。この一文は、筆者が「観照者」スメルジャコフについて述べた予告・予言を受けて、アリョーシャが返した正面からの応答として読まれるべきであろう。ここでアリョーシャは、「故郷の村の焼き払い」と「一切の放棄」の両者を果たした兄スメルジャコフが、自ら赴いた「地獄」の「放浪」の末に、遂には「永遠のエルサレム」に迎えられ、「魂の救済」を与えられること、「神の愛」と「キリストの愛」の内に迎えられることを高らかに宣言したのである。「罪なくして涙する幼な子」に対する「実行的な愛」。作者ドストエフスキがこの作品の根底に置いた中心骨格・問題軸が、ここにその実質的な内容の完成を以って我々の前に示されたのである。

残された課題

我々に残された課題は、血の一线を踏み越えた直後から「悪業への懲罰」に曝されたスメルジャコフが、果たして如何なる神と出会っていたのか、この問題について考えることであった。我々の前にあるのは、アリョーシャの祈りと「ゾシマ伝」最終章との検討が明らかにした二つの事実である。まずアリョーシャのリアリズムが、見事と言う外ないほどに冷徹で厳しいスメルジャコフ像を捉えたものであること。しかし同時に、そのリアリズムを支える愛が、悲劇的悪魔的生を終えた兄の、死を超えた「永遠の生命」を高らかに宣言する力を持つものであること、これら二つである。亡き兄についてこのような見事な愛と認識の透徹を果たしたアリョーシャを前にして、我々が更に何を言い得るか疑問である。だがスメルジャコフとアリョーシャ二人を共に視野に入れ得る情報を与えられた読者としての立場から、残された課題について一言記し、本論を終えることにしよう。

我々はスメルジャコフが直面していたのは、やはり「怒りと裁きの神」と「愛と赦しの神」という、相反する両極の相貌を以って臨む「懼るべき」「活ける神」であったと考えたい。血の一线を踏み越えたスメルジャコフは、「懼るべき」「活ける神の御手」に捕らえられたのだ。

父フォードルの叩き割られた脳天から噴き出す血は、直ちに彼を「怒りと裁きの神」の前に立たせたのであった。だが懼るべき「悪業への懲罰」が現前する中で、最期の一か月、この殺人者は『シリアの聖イサクの苦行説教集』と向き合っていたのだ。改めてこの事実は、いくら注意してもし過ぎることはないであろう。スメルジャコフは運命への復讐を遂げて初めて、その運命がただ理不尽で醜悪なものばかりでなく、愛に満ちたものでもあったことに気づかされたと考えべきであろう。育ての親グレゴリー夫婦、婚約者マリア母娘、そして弟アリョーシャ、これら「親切な人々」が新たな相貌を持って立ち現れ、この人々を向こうに置いて、スメルジャコフは聖イサクの書物を取り上げ、「神の愛」について「キリストの愛」について正面から向き合おうとしたと考えられる。病院にいる時スメ

ルジャコフがイワンに、毎日自分を訪問してくれる「親切な人々」がいることを告げた時とは、同時に彼が「神様」について言及する時であったことも思い起こすべきであろう（第3章^[4]、本章^[4]）。彼にとり「悪業への懲罰」の現前とは、「怒りと裁きの神」に加えて「愛と赦しの神」の現前であり、「親切な人々」を介して、スメルジャコフの内では新たに、これら二つの極性を持つ「懼るべき」「活ける神」との直面が始まったと考えられるのである。兄スメルジャコフの心の内に触れることも、寄り添うことも叶わぬまま、この兄の究極の問題が愛の問題であることを見抜くに至ったアリョーシャと呼応して、スメルジャコフ自身もまたこの問題に正面から直面していたのだ。

悲劇は、彼がこれら二つの相反する相貌を以って臨む「懼るべき」「活ける神の御手」の内であって、最終的に「己の命を絶滅させる」道を選び採ったことである。父親殺しの罪を遂に決定的に自覚し、明日の裁判の場に出頭して「告白」をし、「十字架」への道を歩もうとするイワンを目の前にして、スメルジャコフは自らの罪を贖うべく、一気に「絞首台」への階段を駆け上がってしまったのだ。「怒りと裁きの神」、そして「愛と赦しの神」の前に立ちながら、彼は最終的に「怒りと裁きの神」に応え、「己の命を絶滅させる」という選択肢を選び採ったのである。何が彼をして、「怒りと裁きの神」に応えさせたのか。

「傷ついた自尊心」

ここで本章の冒頭に続いて、最後にもう一度彼の遺書に目を向けよう。

「己自身の意志と好みによって己の命を絶滅させる。誰にも罪を負わせぬため」

「己自身の意志と好みによって」——冒頭でも見たように、ここにいるのは「己の命を絶滅させる」ことによって己の罪を贖うと同時に、己の「自尊心」の最後の表出を試みようとするスメルジャコフである。彼の内なる「測り知れぬ」「傷ついた自尊心」はなお疼き続けていたのだ。だがそれは最早、彼の旧き「傷ついた自尊心」の暗い悪魔的表出と考えるべきではないだろう。「己を絶滅させる」ことを彼に命じたのは、他ならぬ彼の「傷ついた自尊心」自身なのだ。ここにあるのは「愛と赦しの神」に触れた「傷ついた自尊心」から湧き出てきた自己処罰・自己清算への衝動であり、「怒りと裁きの神」に重ねての、断固たる「自己聖絶」への意志である。スメルジャコフにこの選択を迫ったのは、旧い衣を脱ぎ捨てつつある「傷ついた自尊心」であり、そこに臨んだ「懼るべき」「活ける神」だったのだ。発狂をも予想され、死相が出るほどまでに憔悴し切り、彼の内で展開していたのは、この「自己聖絶」を巡る葛藤だったのであろう。

師イエスを敵に渡したユダは、その師が「死に定められ給ひしを見て悔い」（マタイ二十七3）、自ら首を^く縊ったのであった。ユダからスメルジャコフへ。自らに向けられた愛を斥け裏切った者たちが、彼らに臨む「懼るべき」「活ける神」を前にして、自らの罪を贖うべく選び採る「自己聖絶」の道。死相が出るほどまでに憔悴し切ったスメルジャコフが一人

向き合っていたのもまた、逃げ場なく旧き己の絶滅を迫る神、「懼るべき」「活ける神」だったのだ。猫の葬式遊びにおいて生の終わりを自ら司ろうとしたスメルジャコフ。創世記における光の起源を鋭く衝いたスメルジャコフ。更にはイエスを向こうに置き「私はまだ胎内にいるうちに自殺してしまいたかった」と語ったスメルジャコフ。—— 彼は「己の命を絶滅させる」ことで、己の生そのものの始原たる「胎」、万人万物一切の生と死の究極の秘密を司る「懼るべき」「活ける神」の懷に飛び込んでいったのだ。

「己自身の意志と好みによって己を絶滅させる」—— これもまた愛に対する新たな裏切りと言うべきであろう。だがスメルジャコフにとっては、自らの最深奥に疼く「傷ついた自尊心」の根を断ち切って「絶滅させる」こと、このことが己に臨む「懼るべき」「活ける神」に応える唯一の道であり、彼の内なる「自尊心」には、「愛と赦しの神」に自らを委ねることよりも、自らを「怒りと裁きの神」に重ねて「絞首台」への道を選び採ること、己の生的一切を一気に締め括ることの方が潔^{いさぎよ}い道だったのだ。この選択に対してアリョーシヤは冷徹で厳しい眼を向け、兄が自分に向けられた愛を斥けたと見たのであった。彼の判断は正しい。だが自らに臨む「懼るべき」「活ける神」を前にスメルジャコフが採った道は、悲劇的な選択肢でこそあれ、決して悪魔的な選択肢ではない。

もう一度ゾシマ長老がミハイルに示した言葉を挙げて本論の終わりとしよう。

「活ける神の御手に陥るは懼ろしき哉」（ヘブライ人への手紙十 31）。

（了）